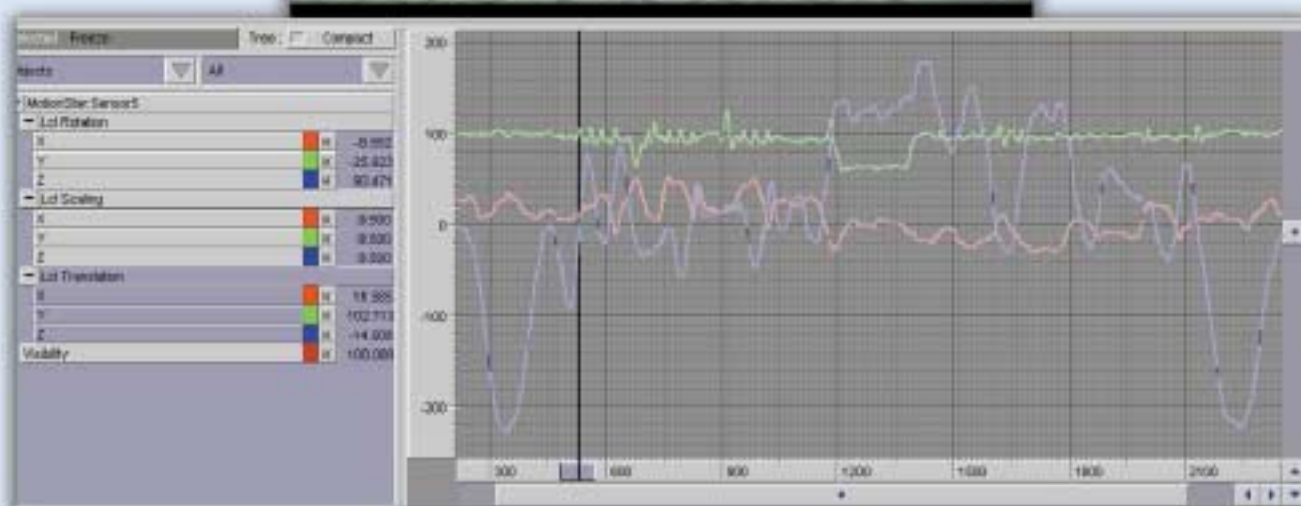


非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

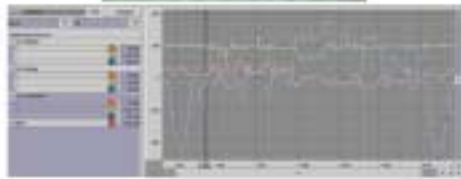
The Study of Nonwritten Cultural Materials

NewsLetter

2005.3
No.7

CONTENTS

表紙写真説明



中国江西省南豊県石郵村の芸能ヌオン（儺戯）の踊り手、叶根明さん、唐賢仔さんのお二人を招いて、わらび座デジタルアートファクトリーのスタジオにてモーションキャプチャーによる収録が行われた。上の画面は収録中の映像に収録データをもとに作成されたコンピュータグラフィックス（CG）による3次元アニメーションを合成したスクリーンショットである。CGによるモデルは動きを見やすくするため、あえて表情をなくし、体の捻りが解るよう角張ったロボット状にしてあり、モデルの動きはあらゆる視点から見る事ができる。下のグラフは腰に取り付けたセンサーのデータをグラフ化したものである。3本のグラフはそれぞれXYZの三軸の位置の変化を表しており、CG上にある三色の がその方向である。このほかに回転のデータも得られ同時にグラフ化することも可能であり、これらの分析により芸能の特徴をより鮮明にすることが期待されている。

（長瀬 一男）

巻頭言	3
桜井 邦朋（神奈川大学名誉教授）	
対談	4
『民具が語る列島の歴史』	
佐々木 長生×河野 透明	
研究エッセイ	ESSAY
倭城・倭館・合戦図	10
文献史料との関わりをめぐって	
三鬼 清一郎	
『絵巻物による日本常民生活絵引』が	12
こだわるもの	
あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの	
君 康道	
色彩意味論研究の社会言語学的アプローチ	14
彭 国躍	
自然と人間、その関係の変移	16
田口 洋美	
フィールドノート	Field Note
環境と民具 再び世界常民について	18
中村 政則	
海外博物館事情	Foreign Museums
アメリカ	
博物館・美術館・大学図書館・暴力のあと	22
富澤 達三	
コラム 北京 改革開放が生み出す景観	24
藤永 豪	
コラム 大衆文化の視覚イメージにおける	25
記憶の伝達	
尹 賢鎮	
コラム 中国民俗界の「東方明珠」	26
華東師範大学中国民俗保護開発研究センターの紹介	
毛 巧輝	
受贈資料一覧	27
研究業績一覧	28
主な研究活動	30
彙報	31
Report & Information	32

神奈川大学21世紀 COEプログラムの 寄せて

巻頭言



神奈川大学名誉教授・宇宙物理学

桜井 邦朋

文字により記録された歴史資料、つまり、文献資料があって初めて、歴史が語れる。このようなことが可能となるのは、ことばを表現する文字があることである。だが、現代では、ビデオほかによる記録があり、映像と音声（ことば）その他の音の集録も、歴史資料として取り扱えるようになっている。写真とそれにつけた説明、これも現代では歴史資料となる。

これらの文字による説明を伴わない非文字資料もたくさん遺されているが、それらは文字による歴史資料を補完する大切な役割を持ち、文字による記録から脱け落ちていることを埋めてくれることになる。そうであるからこそ、文字による歴史資料を伴わない非文字資料は、歴史についての学問的研究の対象とはされず、考古学に資する記録とされることになる。これらの記録の分析から、これらの資料を残した人々の暮らしや文化、或いは、その様式が研究され、解き明かされていく。

文字により記録された歴史資料にも、その分析に当たって注意すべきいくつかの問題がある。これらの資料が、どんな意図や計画の下に作られたかを“正しく”読みとり、これら資料に対し、誤りなき解釈や判断が下せなければ、歴史を読み解いたことにはならない。こんなわけで、研究者のイデオロギーや主義主張（寺田寅彦のいう「イズムの鼎」に当たるか）によって、文字により記録された歴史資料と非文字資料のどちらか、或いは、両者が、当人にとって都合の良いようにねじ曲げられるようなことがあってはならない。

非文字資料は、ビデオや写真による映像化された記録も含めて、それら自体を視る人たちの感情に訴え、何らかの思想やイデオロギーに基づいた解釈へ導くよう働きかける可能性がある。今に至るまで20年余りにわたり原子核物理学の揺籃期から原爆開発以後の歴史について、私は文字および非文字両歴史資料を調査・研究しているが、残念なことに、我が国のこの方面に関わる多くの研究者が、「イズムの鼎」にしっかりと頭を押さえつけられて、研究論文や著書を物してきた事実を見ているので、このような危惧を抱くのである。現代のものといって良いような歴史資料でも、こうした事態が生じるのであるから、歴史をさかのぼった非文字資料の研究には、文字による歴史資料も含めて、こんな事態を招かないように、十二分に心して、立派な資料の集成と研究を進めていただくよう希望している。



対 談

佐々木 長生

福島県立博物館・専門学芸員

×

河野 通明

神奈川大学日本常民文化研究所・教授

『民具が語る列島の歴史』

民具との出会いと研究の方向性

今日は、民具という非文字資料を通して何が明らかになるのか、お二人にうかがいます。まずは、民具との出会いについて一言ずつお願いします。

佐々木 私は、大学を出るとすぐ会津民俗館に勤務しましたが、民俗学の信仰とか昔話とかを中心にやっていたものですから、どうしても民具ってというのはなじみないでいました。その時ちょうど蠟燭を作る道具を国指定にしようという仕事が昭和50年ごろから始まりましてね、その蠟燭を作る道具を集めて並べることによって、話をする人も道具を見て、すらすら、すらすらと、話しをしてくれるんですね。あっ、モノから伝承を語らしめる、これが民具研究かなって思いましたね、それから私は、モノを窓口にして伝承を掘り起こすってことから、民具研究に入りました。そういった中で民具研究講座が、旧常民文化研究所の主催で開かれて、そこに参加したんです。また、民具学会ができて多くの仲間ができて、張り合いが出てきたっていうのがきっかけです。

河野 私の場合は文献史学の古代史が出发点です。1960年代の初めですから、史的唯物論の方法が全盛でした。その前に実証主義の古代史があり、たしかに精緻な研究ですが、感動が伝わってこない。それで「土台が上部構造を規定する」という唯物史観の捉え方に魅力を感じて、社会の基底となる経済、生産力の研究が大事だということで荘園の社会経済史に取り組んだ。しかし振り返ると、文献資料による荘園研究というのは生産関係の研究であ

り、生産力の研究ではない。出来上がった米を年貢としてどう取り立てるかは記録されるが、生産現場の様子はでてこない。生産力にかかわる農業技術史には古島敏雄氏の大著がありますが、文献によりかかった研究で図版が1枚も出ておらず、道具の姿は見えないんです。技術の進歩は道具の形の変化として現れるものなのに、これではアカンということで、関西を中心に民具収蔵庫回りを始めたのが1981年です。私にとっての民具は歴史研究の材料であり、民具を通して歴史を、社会構造を研究するという姿勢で一貫してやってきました。

ある意味で対照的ですね。佐々木さんは、会津という地域の博物館という現場で、河野さんは、大学の中で、資料としての民具の可能性に気づく。

佐々木 私は1973年に会津民俗館という、膨大な民俗資料があるところに赴任しましたが、最初の半年間ぐらいは、民具が置いてあっても、またいで歩いてたんですね。磐梯山信仰とか、飯豊山信仰とか、そういうのをやりたいたって思っていました。そのとき文化庁の木下忠先生がおいになって、民具を見て「佐々木さん、これは、宝の山ですね」と言うんですね。宝の山っていうことは分かるんですが。会津磐梯山は宝の山ですから(笑)。どこに金脈があるか分からなかった。そんな時に、1979年から、常民文化研究所の紀年銘民具の調査が全国一斉に行われました。そこで会津民俗館にあるものをみんな引っ張り出すと紀年銘が百何件くらい出てくる出てくる。江戸時代も元文年間とかですね。それまで民俗学は、伝承

ばかり重んじて歴史性がないと言われていました。学生の時もよくそういう論争をしたこともありましたが、答えがでなかった。ところが会津民俗館に来て、紀年銘民具調査をやったときに初めて、これで民具、民俗の中にも歴史が裏づけられるじゃないか、って民具研究の面白みを発見しました。また、田島に文化5年の唐箕があるとなれば、唐箕はいつごろからあったんだろうと『会津農書』を紐解いたんですね。その時に河岡武春先生に、せっかく調べたものは報告しなさいといわれて『民具マンスリー』に、貞享元(1684)年の『会津農書』に唐箕が会津地方で使われていたと書きました。ところがそれが日本で一番古い唐箕の記録だったんですね。そして会津には『会津農書』に1年おくれで、寛文5年の『風俗帳』とか、貞享2年の『風俗帳』とか、文化6年の『新編会津風土記』とか、うんと記録があって、そこで、風俗習慣とかいっぱい載ってくるんですね。つまり会津はモノが豊富である、伝承が豊富である、そしてその裏づける文献、記録がある。この3つを重ねることによって、民具を窓口にした私なりの民俗学研究ができる。これが私の今やっている民俗学研究なり、民具研究ですね。

河野 私の場合は、収蔵庫回りを続けていくうち、ダーウィンの進化論の方法と同じだと気がついたんです。ダーウィンは、いま生きている生物を比較して進化の程度の差を見出し、それを縦軸に置き換えて進化論をたてた。民具でも同じことが言えるんです。収蔵庫の農具類も比較するとより古いタイプ、より進化したタイプがあり、その形態の違いを縦軸に並べ換えて発展を見通せた。また、国語史をやりたかった私は、民具の呼称を伝来の年代を決める手がかりとしています。紀伊半島では牛の首木には首かせ棒が付いていて、ウナグラと呼ぶんですが、ウナグラという呼称から、首筋をウナジではなくウナと呼んでいた時代に伝わったということで6世紀に絞れた。首かせ付き首木は朝鮮半島系のもので、6世紀に朝鮮系渡来人が犁を持ち込んだことが証明できた。馬鍬についても、全国的にウマグワ系の呼称が使われていることから、馬しかいなかった時代に伝来したことになり、5世紀に中国の江南から伝来したことが論証できました。

民具における連続性と非連続性

変る脱穀調製具、変らぬ耕起具

民具資料に歴史性を認めながら、佐々木さんは地

域の中で生きている民具誌に基づきながら民具の来歴を追い、河野さんは個別民具を全国レベルで、広域的に形態を中心に検討する研究法をとるわけですね。

佐々木 会津民俗館は喜多方市の奥に立地する熱塩加納村出身の渡辺^{つとむ}聖さんが1967年に創った博物館です。元は、只見町の馬宿、茅葺き民家を移築したドライブインでした。高度経済成長期に、ふるさとブームが起きる。山口弥一郎・岩崎敏夫先生が民家や民具保存の重要性を訴え、収集を指導しました。最初は会津民俗資料館と言っていたのですが、印刷物がミスプリで資料の字が抜けてしまったので、ああ民俗館の方がいんでねえかって、民俗館になったんです。会津が「民俗館」の元祖ですね(笑) 4~11月までは日中は売店に出てハッピー着て、観光客相手の売り子になって、主に夜勉強したんです。冬期間は、寝具・仕事着・製蠶用具コレクションを整理して県・国指定にするなど無我夢中で働きました。この民具が分からないとなると、すぐそのモノを持ってお婆ちゃんの所へすつとんで行って、これ、なんだ?なんだ?って、聞いて歩いた。いま思うと、いつの間にかモノを持ちながらの民俗研究を自然に教えられた。館も、財団法人化、登録博物館と観光的な資料館から学術的な博物館に変わっていききました。今なら「観光民俗学」でいくつも論文が書けます。そういう意味では、私は会津民俗館の成長とともに、モノから民具研究を教えられたっていう、まさにほんとに、叩き上げの学芸員になって気がします。ですから理論には弱いのです(笑)

河野 その点は私も同類、佐々木さんのモノから学ぶ姿勢に共感します。理論を云々するより収蔵庫でモノを見ているほうがワクワクする方です。学という「学」^{がく}縁はなくても研究は出来る。夢中で研究していれば方法論は後からついてくるもんです。まず絵を描くことが先で、絵がよければ額縁は絵が出来上がってからつければよいわけです。ところで民具を扱いながら私と佐々木さんとの相違点は、対象とする農具の違いです。佐々木さんは脱穀調製具を体系的に研究している日本で唯一の人です。千歯扱や唐箕の個別研究をする人はいますが脱穀調製の流れ全体を捉えようとしているのは佐々木さんだけです。私が、堀家本『四季耕作図巻』で篩としたものを、佐々木さんがユリワと訂正されたのには教えられました。私の研究は、耕起具系統で、古代に遡る研究です。大正・昭和の農具から、なんで古代が見えるのかと聞いて



対談

てくる人は、道具は時代と共に変わるものだと考えている。ところが道具はそれほど変わるものではなく、そこに法則性があることが見えてきた。生活用具と生産用具に分けると、生活用具はどんどん変わるのに比べて生産用具は変わらない。生活用具は人間の都合でいくらでも変えられる。ところが生産用具は相手が自然であり簡単に変えられない。また農具に限定すると、稲刈りを境にして、以後の脱穀調製具は割と変わる。千歯扱が発明されると全国に千歯扱が普及する。唐箕^{からすき}が伝わり、全国的に普及する。それに比べると、鎌とが犁とが馬鎌とかいった耕起具は変わりにくい。また人が使う鎌と、牛や馬に引かせる犁や馬鎌と比べると、牛や馬に引かせる方が変らない。理由の一つは所有形態で、鎌は個人持ちで、手の延長として個人の裁量で変えられるが、犁や馬鎌は家に付属し、飼養など全体がシステムになっているのでたぶん変わりにくい。耕起具という一番変わりにくい農具だからこそ古代まで遡れる。

佐々木 確かに、6~7世紀頃の福島県相馬市大森遺跡、8世紀の山形県の上浅川遺跡出土の馬鎌の形態は、歯が木製か鉄製かの違いだけで、近年まであった馬鎌と変わりませんね。静岡市の瀬名遺跡・登呂遺跡出土の田下駄、横に長いナンバは、貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』に記載があるし、猪苗代湖周辺では昭和35~6年頃まで使われていました。耕作用具は、ほとんど変わっていないといえます。また、会津地方では、全国的に消滅したモノが実際に使用されています。粟や稷の穂摘み具、コウガイは青森・岩手・秋田県あたりの平安期頃までの遺跡から出てきます。調製具である汰桶^{ゆりおけ}は、他地域では福井



河野 通明

神奈川県立日本常民文化研究所・教授

県勝山市の祭礼や、『絵本通宝志』の絵に描かれているように、供物を頭上運搬する形で残っているだけです。会津では、民具から、残存性または共存性が読み取れ、地域民俗の連続性を認めることができるのです。

犁・牛馬耕の普及

河野 もう少し農具が変わらないという話を続けると、現代社会は、より良い暮らしを目指してどんどんモノが変わっているけれど、飢饉や疫病にさらされていた中世以前の前近代では、これまで通りの生活が維持できるかどうか勝負です。駅伝ではチームの誇りをかけて走者の間で襷をつなぎますが、前近代の人々は家族の生存をかけて、世代の間で犁をつないでいく。生命がかかっているのでリスクは避けて、先祖代々使ってきて安全性が証明済みの農具を子孫に伝える、壊れても同じ形のまま作っては伝えていく。農具は20年ぐらいで壊れるとして、100年で5回、犁は7世紀に形が固定して以来、65回ほど更新しながらも形を変えずにきてるんです。6世紀に伝わった紀伊半島のウナグラも朝鮮半島の首木と同形であり、6世紀に枝分かれしてお互い変わらないまま20世紀まで来てしまった。山口県に伝わるウナグラも、中国の山東省のものと変わらない。おそらく7世紀に入ってきたもので、1300年間も形は変わっていない。

佐々木 会津には不要になったモノでも、3年取っておくとまた、シャバに出るとい言葉があります。だから、絶対に形にあるものは捨てるなといひます。また、石臼の引き木が折れたとき、その日のうちに替えが見つからなければ家人が死ぬといひます。予備を必ず用意して置けといひています。モノが少ない時代、農民は新しい物が流行しても、すぐに飛びつかない。また焼き畑をやっていた所、収穫量も少ない所では、大きな道具、発達した道具はいらない。伝統的な作り方を変えることなく踏襲する。ナンバなんか、湿田ではあれ以上のものはないですよ。そういうことは、文書や伝承では語れない、民具、モノがあるから語れるんです。

河野 牛に引かせる犁は、カラスキという名前からしても日本人の発明ではない。明治以来、戦後にいたるまで、日本で発明され進化したという学説が繰り返して主張されてきましたが、これは間違いです。日本には朝鮮半島からは三角枠で無床犁系統、中国からは、四角枠で長床犁系統が入ってきます。日本の在来の犁は実に複雑多様で、

嵐嘉一さんは0型から5型、亜型含め7つ分類した。私も色々考えたけれども、結論的には中国系・朝鮮系・混血型としました。混血となれば、どちらの遺伝子をどの程度引継ぐかでパラエティーがあるわけで、これで日本の在来犁の多様性は一応説明がつく。もう1点、農具の形態については、地形・土壌への適応の結果だとこれまで説明されてきた。そのため歴史が見えなかったんです。長床犁は水田適応型、無床犁は畑作用と説明されてきましたが、現実には関西では山田でも平野でも粘土質でも砂地でも、全部、長床犁を使う。九州では無床犁の抱持立犁を、畑でも水田でも使っています。

佐々木 東北地方は、馬鍬も使っているのに、明治中期まで、犁が使われませんでした。『耕稼春秋』、『農業図』などを見ると石川県あたりまで犁で耕している。東北地方などは三本鍬での田起こしをし、何故、便利な犁を導入しなかったのか？

河野 日本には6世紀に朝鮮系渡来人により初めて犁が入る。東北は、蝦夷の世界で大和政権の支配圏外だったので、入らない。大化改新政府も中国系犁を普及させますが、それも支配下しか伝わらない。只見には小型の無床犁がありますが、あれは栃木県につながるもので、7世紀の百濟・高句麗難民の持ち込んだものかも知れない。その辺りが在来犁の北限で、東北地方の大部分には江戸時代まで犁が無かった。私は今のところ、そう考えています。鹿児島も、薩摩藩が17世紀半ばに殖産興業策として長床犁を導入しますが、それ以前は犁はなかった。薩摩は律令政府に頑強に抵抗していた隼人の地で、7世紀には大和の領域に入っていません。つまり朝鮮系渡来人が来たり、また大化改新政府が長床犁のモデルを配布した、そうした7世紀の時点で国家の領域に入っていたかどうかという、高度な政治的条件が犁の分布を決めているようですね。ということは逆に、犁の分布から古代の政治まで見えるということになります。

佐々木 明治には東北地方に福岡県の林遠里の所から馬耕教師がきています。庄内地方には、明治30年代頃の絵馬が残っています。背広着て山高帽を被って馬耕している姿。しかし、東北地方は冷風ヤマセ、冷水で田を大きくできない。田を小さくして水温を上げる。その灌漑・排水の設備も無いから、棚田形式になる。馬耕の条件が整っていない。今の圃場整備と同じです。コンバインとか大型トラクターが入るために三反規模の田になります。



佐々木 長生
福島県立博物館・専門学芸員

河野 東北には引手なしの馬鍬があります。馬鍬は一般に牛馬の方に向かって2本の棒が出ていて、その先に縄をつける。中国・東南アジアから韓国・日本を含めてすべて引き手がついています。ところが東北地方の馬鍬にはない。他所での使用例を見て、記憶に留め再現製作した時に、使用状態では引き手と引き綱は一直線なので、見落としてしまったと考えられます。他方、東北地方には引き手付きの関東中部型馬鍬も点々と鳥状に分布する。律令期に城柵の柵戸として移住させられた屯田兵が持ち込んだものと推測されます。これを真似たのが引手なし馬鍬なのでしょう。民具調査から東北の古代が見えてきた気がします。

民具の中の伝統性、持続性、連続性に注目されている訳ですが、逆に、モノが変わる契機は何でしょうか。

河野 日本でモノが変わる契機といえば、朝鮮半島や中国から新しいものが入ってくるというのが大きい。6~7世紀の朝鮮系渡来人は牛や犁、木摺臼、背負子も持ち込んだ可能性が高い。平安後期からの日宋貿易では結桶など中国江南地方の生活用具が入ってくる。とくに禅宗寺院の台所から石臼・蒸籠など、粉食文化に関するものがどっと入ってくる。16世紀末の秀吉の朝鮮侵略の時には、大名や従軍した兵たち、彼らは農民ですから脱穀用のコキバシを持って帰ってくる。カラハシという呼称が残っていることからこのときでしょう。戦国時代から江戸時代には、中国江南地方から土摺臼や唐箕・唐鍬・備中鍬などが、さみだれ的に入ってきますね。それに政府や大名の



対談

殖産興業政策も無視できない。古墳時代の大和政権は江南地方から馬鍬を導入しましたし、大化改新政府は唐から長床犁を入手して、改良を加えてそのモデルを全国にばらまいたらしい。江戸時代には加賀藩や薩摩藩が長床犁を馬耕という形で藩内に広めた。これらはみな民具の痕跡から復元できました。商業が盛んになって、千歯扱や万石など、日本独自の農具が発明されるのは江戸時代になってからです。こうして振り返ってみると、日本の技術革新は、アジアからの刺激がたいへん大きい。これまで何となく信じられてきた、農民たちは先祖代々その土地の風土に合わせて、少しずつ農具を改良してきた。それが千年の年月を経て、今われわれが見るような、各地さまざまな農具になった、というのはほとんど神話ですね。

地域農業資料としての農書

農書は、当時の地域農業の実態をどの程度反映しているのか、あるいはそもそも農書の書かれた目的はなんだったのでしょうか。

佐々木 農書はおおよそ元禄時代から各地で、自立したばかりの小農民、本百姓を指導するために書かれました。作者は主に学者・上層農民・下級武士で、実務的な農書は上層農民の書いたものです。中でも、時代が早く、著述舞台が明確なのが、1684年刊の『会津農書』です。宮崎安貞の『農業全書』よりも、13年も早い。土の重さ、色、味が調べられ、その結果を黒土、黄真土、白土と全部で9種類に分けるなど、作者佐瀬と次右衛門の自らの実体験と、磐梯山に残雪が虚無僧の姿になったら、種初の時き時、イモチ病のときには笹を立てるなど「郷談」といわれる昔からの言い伝えが記されています。中国の農書、『王禎農書』を参考にすると、元禄5(1692)年～宝永4(1707)年間の天気が全て記されています。さらに、農耕儀礼など前代、中世会津の民俗が書かれ民俗学的資料としても使えます。凶作回避、寒冷地会津における作物連鎖、作付け体系に目配りが利いた、土作り重視の有機農法書です。近年、寛延元(1748)年の『会津農書』の写しも出ました。107点の農具の解説がなされ、延宝年間の汰板の使用、汰桶から京篩に、さらに板篩への変遷などが記載されています。木摺臼の材料が、明暦・万治期から、ブナから松にかわり、両縄から片縄になり作業能率が倍になったことなどが記されています。近世農具の使用年代を位置づける貴重な学術資料として高い価

値を持っています。

絵農書もありますね。

佐々木 絵農書といっても、農耕図屏風、四季耕作図屏風、農業図、絵馬などがあります。風俗書上帳の中に、宝暦13(1763)年の『北郷鄙土産憐民政要』上下2冊が、残っています。会津地方には、狩野派や四条派を学んだ農民出身の画家、佐藤沢準、遠藤香村らがいて、農耕図屏風や絵馬を描いています。絵は上手くはないけれど、会津地方の農具、風俗を忠実に描いています。仕事着のサルツパカマ(猿袴)を着ている姿など絵農書から、当時の農業・農民姿が復元出来ます。

河野 『会津農書』の記述と現実の民具分布とのずれ、菅江真澄の摺臼図との比較も面白い課題です。日本の伝統的な木摺臼は、お尻を地面につけ二人が向き合って歌を唄いリズムを取りながら引く縄引き方式ですが、『会津農書』には延宝(1673～81)の頃より「片縄引」が始まった。この片縄引きは両縄引きより仕事ははかどるといっている。菅江真澄の『百臼之図』(異文一)には縄引き型を「もろてびき」、縄穴に棒を突っ込んだタイプを「片手曳」と記している。これらについては諸手引き=両縄引き=縄引き方式とし、片手曳=片縄引=棒挿し方式とするのが妥当でしょう。この棒挿し方式はクランク駆動なのでわたしはクランク型とも呼んでるんですが、民具ではこのタイプは岩手中南部が中心で山形県にも若干ありますが、福島県で見たのは今のところ縄引き方式だけです。となると『会津農書』に指摘している17世紀の改良は、岩手あたりが発信源だが会津にはあまり及んでいない。また『会津農書』には木摺臼には「往古よりぶなの木ばかり用い來たる。明暦、万治(1655～1661)のころより、松木をも用いるなり」と言ってるんですが、民具



縄引き型
福島県金山町・こぶし館



クランク型
岩手県大東町・岩手県立農業科学博物館

では東北地方全域、東北以外も松一色なのに対して、会津では広葉樹のようなものが混じっている。『会津農書』の記述と民具分布には若干のズレがあるんですね。これは今後の研究課題です。

民具からの文化情報発信

今では、インターネットですが、渋澤敬三は人と人のネットワークによる民具資料の情報化システムを考えました。

佐々木 民具研究講座、民具学会も設立後30年以上経ちました。民具の個別的研究は細分化し進みましたが、全国的な位置づけがわからない。会津地方では、農書・風俗帳なども合わせ、汰板に年号が無くて、次の万石の年号から、また半唐箕の一番古い紀年銘が天保期ということになるなど、およそ脱穀・調製具の変遷が時系列で推測できるまでになりました。旧日本常民文化研究所が1979年に行った紀年銘民具の調査のような全国的な調査を、再度提案したいと思います。

河野 民具は懐かしいけれども、かさが高いし、汚いし、珍しくもない。市町村合併もあり、収蔵された民具も危ない。それで民具から何が言えるのかと問われたとき、私は、民具から地域の古代史が見えますと答えている。これまでの古代史研究は、『日本書紀』や『古事記』に依っているので、地域は都近辺が中心、階層では天皇・貴族、中身は政治・外交、しかも、事件性のあることに限られます。そうすると、一般庶民の日常生活を支える生産やら生活が見えてこない。ところが、民具は全国どこにでもあって、比較研究をやれば、それぞれの地域の古代が復元でき、しかも、この地域のこの辺には6世紀渡来人がいたよ、7世紀には百済・高句麗難民がこの辺に住んでいたよと示せる。地域の民俗分布図まで描けるような情報を提示できる。民具の現状を考えると、研究でそれを引き出し、学会発表するだけでは不十分で、その成果を地元に戻し、地域住民が、地域とはなにかともう一度考え直す時、一番大切なものが民具だということの認識のもと、住民運動で民具を守るような運動を起さないと、民具は守れないところまで来ている。

佐々木さんは只見方式という、住民自らが民具の



語り合いの中で民具カードを作成する只見町の人たち

記録化、保存活用をはかっている運動の推進者です。
佐々木 只見町の山村生産用具と仕事着コレクション、2,333点が、国指定になりました。実際、民具を製作したり、使用してきたおじいちゃんやおばあちゃんが、孫に語る気持ちでカードを作り、実際に使う姿を写真撮影し記録化しました。自ら整理したカードをもとに、『図説 会津只見の民具』という本を作りました。1,000冊の本が、わずか、40日で完売しました。学術的価値も高いわけです。それ以上に、民具を通して地域の自然・歴史・民俗を再認識するきっかけとなりました。只見の商業、「ここはまだ携帯電話が通じません」という中学生の言葉には自然の恵みを感じます(笑) そんな過疎の山村の住民が自身の地域の文化に誇りを持つようになり、ブナ林を世界遺産へ登録する運動が現在進められています。かつては、骨董屋が来て、蔵ごと民具を買っていった。今は誰も売ることもなく、逆に、民具をみんなで作るようになっています。アケビ・マタタビ蔓細工とかの民俗技術が遺されようとしています。只見町の民具資料の保存と活用の事例を、中国など今まさに民具が省みられなくなっている近代化の途次にある国の研究者や地域住民に紹介したいです。

今回は、学術資料としての民具だけでなく、地域の人々にとって生活を再考する資料として活用されている具体例まで教えていただきました。長時間にわたり、ありがとうございました。

(2005年1月24日 COE共同研究室、聞き手：佐野賢治 記録：関ひかる・網野暁)



倭城・倭館・合戦図

文献史料との関わりをめぐって



三鬼 清一郎 (神奈川大学大学院・教授)

1 はじめに

これまでの歴史学が文献史料(とくに古文書)を中核に据え、他の分野の研究成果を十分に吸収してこなかったことへの批判や反省から、新たな試みが始まっている。COEプログラムの「非文字資料の体系化」もその一つである。歴史学の側からみれば、このような成果を歴史の論理に組み入れ、文献史学の内容を豊かにしていくことが必要であろう。文字資料の重要性が認識され、それがもつ固有の役割が明確化されれば、たとえば、江戸時代の地方文書や地方書が描き出す世界が、民俗学や口承の研究に豊富な素材を提供していることも周知されていくと思われる。景観・環境の問題についても同様のことがいえよう。

2 歴史的景観をめぐって

名所・旧跡といった歴史的景観は、文芸作品に歌枕として登場するが、歴史研究の対象にはなりにくかった。その多くは、風光明媚な自然環境の中に寺社などの建造物が配置され、聖なる空間が形成されていた。それゆえ、人為的な手が加えられることなく保存されたといえよう。もちろん、自然災害による環境の変化がおこり、人間の生産活動で、たとえば新田開発の進展が影響を与えてきたことも事実である。人為的影響の最たるものは戦争で、15世紀後半から百年におよぶ戦国の争乱が、景観や環境に与えた影響は計り知れない。

戦争はまた、百姓・町人を生業の場から引き裂き、夫役の徴発に駆り立てた。鉄砲の伝来によって戦闘が集団形態となり、各地に城郭や城館が築かれた。大規模戦争を支える兵糧米は、さらに苛酷な年貢徴収を生み、村落構造にも深刻な打撃を与えている。それがピークに達するのは、16世紀末に豊臣秀吉による朝鮮出兵(文禄・慶長の役)であろう。

再度にわたって企てられた出兵は、前近代社会における殆ど唯一の対外侵略戦争であるが、舞台が外国にも広がり、マイナスの遺産は今日にも及んでいる。それを真

摯にうけとめ、研究に生かしていくことは我々の責務であるが、景観や環境といった非文字の世界を考える手がかりを残している。たとえば、倭城・倭館といった日本関係の建造物がそれにあたる。

倭城は、日本軍によって造られた城郭で、多くは朝鮮半島の南部に存在する。築城技術に長じた加藤清正などの武将が、自然環境の破壊を前提に築いたもので、当然ながら民衆の怨嗟の的になっている。しかし、最近では日韓の研究者による共同調査が行われ、史跡として保存される気運も高まり、縄張図の作成も進められている。

倭館は、室町時代に李氏朝鮮政府が、日本人の使節を接待するために設けた客館で、当初は三ヶ所あったが、のち釜山の一ヶ所だけとなった。朝鮮出兵の際には釜山城に包摂される形で消滅したが、国交が回復した江戸時代には復活し、対馬の宗氏を介する外交・貿易に中心的な場を提供していた。いわば、平和の時代に朝鮮の風土の中に築かれた建造物であるが、現存していない。

倭城・倭館ともに往時の姿を復元することは困難であるが、絵図などに手がかりが残されているので、それから探っていく必要がある。

3 合戦図の事例 「蔚山図」の紹介

ここに紹介するのは、「朝鮮蔚山合戦之図」という表題で前田育徳会尊経閣文庫(東京都目黒区)に架蔵されている淡色彩の一枚の絵図(69.5センチ×68.5センチ)である。秀吉の朝鮮再征にあたる慶長2年(1597)12月22日、浅野幸長が在番中の蔚山城に明・朝鮮の大軍が包囲した。この城は朝鮮半島の東南端(慶尚南道)に位置するが、近くにいた加藤清正らが急を聞いて入城し、毛利秀包も大軍を率いて救援に赴いた。戦闘は翌3年正月4日に包囲が解かれ終結したが、この絵図には、合戦の様子が時間の経過とともに記されている。

壕で囲まれた蔚山城の周辺には朱点が無数に記されているが、これは死骸の山である。朱丸は主だった武将が討ち取られた場所を示し、戦闘の激しさを物語っている。

墨で書かれた説明文は非常にリアルである。内容から判断して、筆者は加藤清正の家臣で、帰国直後に記憶を辿りながら記したとみられる。

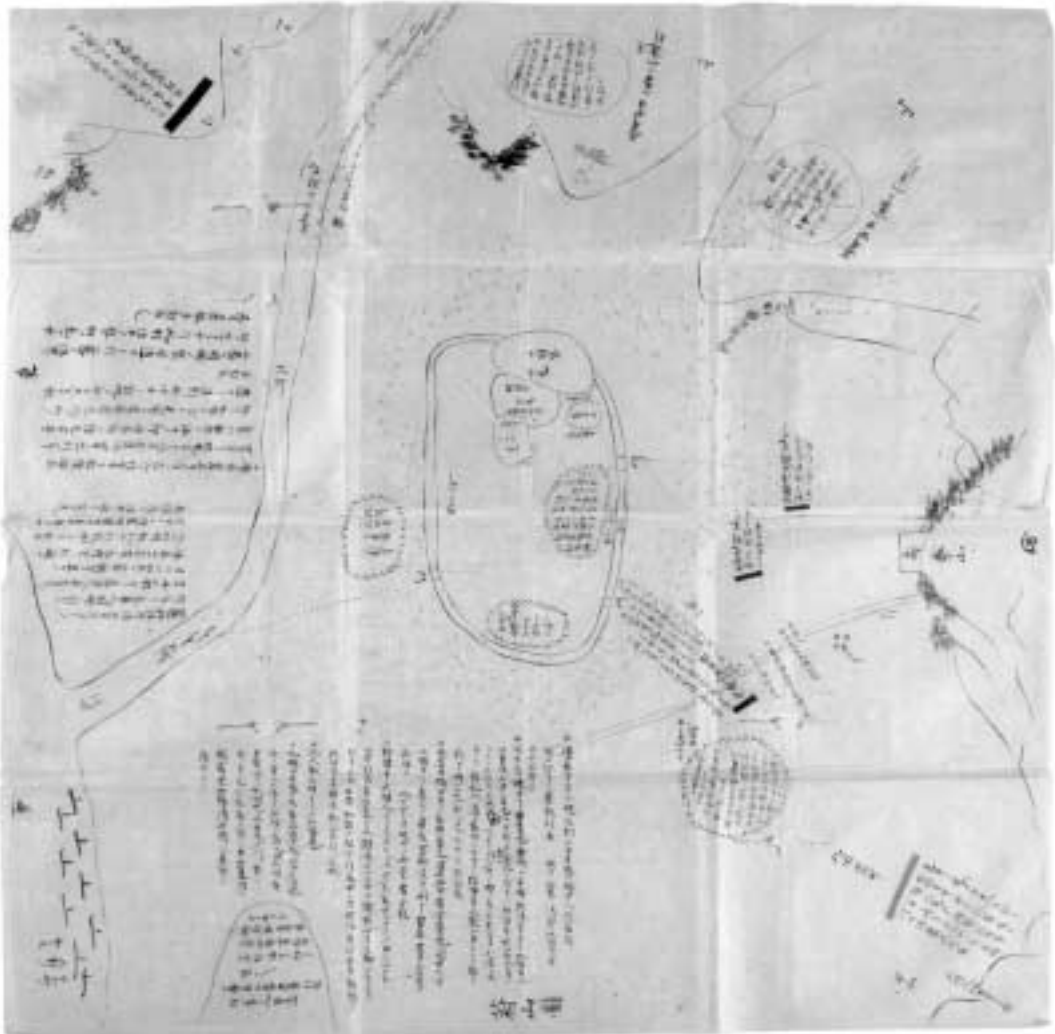
この城は日本勢が砦として築いたもので、山地にあるため石垣の高さは2、3間で通常より低いが、隅櫓の下は7間の高さであった。厳冬下での普請のため土手や堀も不完全で、攻撃を受けたとき防御ラインは弱かったようである。しかし、朝鮮半島の南部沿海を確保する戦略上の拠点で、熾烈な攻防戦が展開された。対陣は14日間におよび、城内の兵糧は尽き果て、荷物運搬用の牛馬までが食用に供されるほどであった。その間、明軍の側から和議の申し入れがあったが応じなかったという重要な内容も記されている。

絵図そのものはスケッチ風の略図ではあるが、蔚山城をとりまく四囲の状況が記されており、全体像を把握するのは都合がよい。軍勢の配置状況のほか、明・朝鮮

軍の進入路や、どの軍勢がどのルートで退却したかといった細かな点を知ることができる。また、大軍に包囲された城内に、なぜ加藤清正らが入ることが可能であったか、なぜその包囲が突如として解かれ、撤退が開始されたかといった事情を知る手がかりも残されている。

4 おわりに

朝鮮での合戦を含めて、戦闘の様様を描いた屏風絵は多く存在し、研究も盛んに行われている。この絵図は、通常の合戦図屏風とは趣を異にするが、他の史料と対照すると興味深い事実が浮かび上がってくる。それは、文字で記された内容が、他の合戦図屏風などを考察するうえでも重要な手がかりを与えてくれる点で、非文字資料の研究に果たすべき文字の役割の大きさが認識される次第であるが、詳細は紙幅の関係で別稿に譲りたい。



「朝鮮蔚山合戦之図」前田育徳会尊経閣文庫所蔵



『絵巻物による日本常民生活絵引』がこだわるもの あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの



君 康道 (COE共同研究員 / 東京大学大学院・専任講師)

本COEプログラム第1班「図像資料の体系化と情報発信」の共同研究員として参加させていただき、その中で、主に『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下『日本常民生活絵引』と略す)のマルチ言語版の編さんプロジェクトに関わらせていただいている。この『日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんにあたっては、研究会で種々検討された結果、全5巻の内容を3巻分に吟味し直して纏められることが決まり、本年度はその手始めとして、第2巻に収められている『一遍聖絵』の編さん作業が進められている。

実はこの『日本常民生活絵引』なるもの、その世界ではあまりにも有名な書物であるにも関わらず、恥ずかしながら私自身が今まで身近に利用することは殆どと云っていいほどなかった。そのため実際には共同研究員とは名ばかりで、ある意味私も一人の学生として、このプロジェクトの中で本書についてのまさに「いろは」から勉強させていただいている。手始めとなる『一遍聖絵』の編さんにあたっては、『日本常民生活絵引』そのもののみならず、その題材となっている絵巻の『一遍聖絵』自体や一遍自身についても知識を得る必要を痛切に感じ、図書館で美術書を借りて原本の『一遍聖絵』の全容に目を通し、関連書を繰り、さらにはそれらのゆかりの地を訪ねてみたりもしている。そのように『日本常民生活絵引』や『一遍聖絵』について調べていく中で、ふと気がついたことがある。それは『一遍聖絵』の中では重要と思われるような場面が、『日本常民生活絵引』では殆ど取り上げられていない場合がある、ということである。

一例を挙げてみよう。原本の『一遍聖絵』第10巻には一遍の厳島神社参詣の様子が描かれている。これは弘安10年(1288)一遍の2度目の厳島参詣の様子を描いたものだそうで、そこには船で厳島へ渡る一遍に続き、厳島神社において一遍を尊んで舞楽が演じられている様子が描かれている。海上社殿の建築美の描写もさることながら、そこに描かれている人々の表情、動きのなんと豊かなことか。この精緻な人物描写も『一遍聖絵』の大きな

特徴と言えるであろう。

しかし、このように『一遍聖絵』において非常に興味深い描かれ方をされている厳島神社ではあるが、『日本常民生活絵引』に目を転じてみると、なぜかこの厳島神社の社殿は全く取り上げられていない。『日本常民生活絵引』において厳島神社の場面が取り上げられているのは「船」の項目においてのみであり(新版第2巻pp.144~147)その場面に描かれている客船、渡し船、商船の部分が切り取られ、それらについて解説が付されているのみである。

さらに興味深いことに、社殿が全く取り上げられていないにも関わらず、なぜか船の後方に描かれている大鳥居だけが、厳島神社に関連する事物の中で唯一『日本常民生活絵引』に取り上げられている。この『日本常民生活絵引』は取り上げられた場面を模写する際に、あえて不必要と思われる部分は大胆に白抜き状態にカットされているのだが、この厳島神社の大鳥居はカットされることなく、絵引の対象の一つとしてキャプションが付けられている。しかし解説文の中ではこの大鳥居も取り上げられることなく、船についての解説に終始している。

厳島神社の大鳥居と言えば、社殿とともに海上に浮かぶ荘厳な姿がやはり思い出されるが、その形はいわゆる「両部鳥居」という、主柱の前後に控柱を立て、上下二本の貫で繋がれた非常に存在感のあるあの形である。しかしこの『日本常民生活絵引』に描かれている大鳥居は、いわゆる「明神鳥居」と呼ばれる二本足の掘建ての形のものである。鳥居を浜辺に建てる場合、明神鳥居のような二本足の鳥居ではせっかく掘った掘建ての穴が潮の干満で埋まってしまう、その作業に困難を伴うため、柱を掘建てにしなくともよい両部鳥居の形の方が理想的なのだそうだ。この時期の厳島神社の大鳥居が果たして本当にこのような形であったかどうかは、今の鳥居の形しか知らないものとしては非常に興味のあるところであるが、そのようなことにさえ『日本常民生活絵引』には一切触れられていない。更に言えば、『一遍聖絵』に描かれている厳島神社の社殿配置そのものも、実は現在のものとは

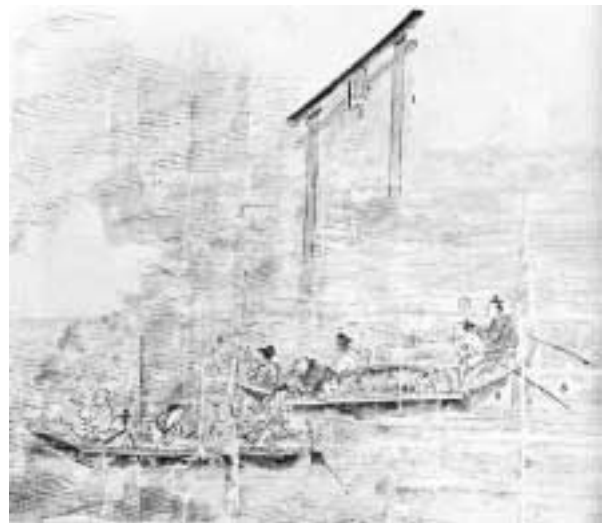
全く異なるようだ。

なぜこのように興味深いと思われる事例が、『日本常民生活絵引』においては全て排除されているのだろうか。それはやはり、この『日本常民生活絵引』が、「常民」の「生活」というものに非常に強くこだわっているということの表れのように思われるのである。厳島神社社殿の創建は推古天皇即位元年(593)と伝えられるが、今のように優美な海上社殿が造営されたのは、久安2年(1146)に安芸守に任ぜられた平清盛の崇敬を受けるようになってからだという。平家一門の篤い信仰に基づき造営された建築物に関しては、澁澤敬三をはじめとする『日本常民生活絵引』の編者たちは「常民」の「生活」には関わりが無いということで、思い切って場面の切り取りは行わなかったのではないだろうか。そう考えると、厳島神社の舞楽の場面に描かれている人物は僧侶を除くと上層階級とおぼしき人たちが主であり、その服装やしぐさも当然対象として取り上げられるべきものではない。あくまで本書は「常民」の「生活」の「絵引」であり、単なる絵巻物の解説や歴史絵引ではないのである。ただ唯一厳島神社の大鳥居だけは、上層階級の生活と常民の生活を分かつ「シンボル」として、意図的に取り上げられたのかもしれない。

しかし、絵巻の順序やストーリー性を全く排し、その中に描かれた図像資料を抽出してそれぞれに名称を与え、「住居」「交通・運搬」など15の独自の分類に従って配列し、解説を施すという本書の構成自体を今一度考えてみても、そこに「常民生活」というものに大きくこだわっている本書の思いが見てとれよう。あるいはそれは、本書を最初に企画した澁澤敬三の思いと言い換えてもよいかもしれない。こうした『日本常民生活絵引』が前例をみない仕事であったと同様に、今回のマルチ言語版の編さんもそれまで前例をみない仕事であり、具体的にどのような利用者を対象として編さんを進めていけば良いか、研究会では今も議論が重ねられている。対象者を広げれば広げただけそこに詰め込む情報量や翻訳にかかる作業量が比例して増え、逆にそれらを少なくしようとすると今度は対象者が限られてしまい、極端に言えば日本語を解する一部の研究者のみしか利用できない本末転倒なものが出来上がってしまいかねない。それをどこでどのように折り合いをつけていくか、未だ暗中模索をしながらその作業が進められている訳だが、そうした中でこの『日本常民生活絵引』について勉強すればするほど、本書に込められた編者たちの思いというものが、いかに大きい

ものであったかがわかるような気もするのである。

あまりにも大胆とも思える澁澤敬三のアイデアと共に、その具体化に力を注いだ編者たちの本書への思いが、今も本書が広く利用されていることの大きな所以なのであろう。『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんにあたっては、やはりただ単純にその内容を翻訳するばかりではなく、「常民」の「生活」の「絵引」にこだわった彼らの思いそのものも伝えていかなければならない。事業推進に残された時間はそう多くはないが、本プロジェクトが将来の人類文化研究に果たす役割の大きいことを信じて、微力ながら私自身今後も作業に従事出来ればと思う。



『絵巻物による日本常民生活絵引』に取り上げられた厳島神社前の風景(新版第2巻p.145) 原本の『一遍聖絵』では、左方に厳島神社の社殿が描かれている。



現在の厳島神社大鳥居。(筆者撮影)



色彩意味論研究の 社会言語学的アプローチ

彭 国躍 (COE共同研究員 / 神奈川大学大学院・教授)



色にかかわる研究は、哲学、物理学、生理学、心理学、文化人類学、言語学などのさまざまな分野において行なわれている。言語学においては、意味論、特に色彩語彙の意味体系、概念カテゴリーの構造において大きな関心が寄せられている。ここでは主に色彩意味論研究の基本的な考え方と、筆者が社会言語学の立場から今後取りかかろうとする2つのテーマについて概説したい。

1 色彩カテゴリーの基本的な捉え方

色はわれわれの可視世界において普遍的に存在する現象である。自然言語における色の概念カテゴリーについて、基本的に実在論、認知論、唯名論という3つの見方が存在する。

実在論とは、言語は外部世界に実在する色彩カテゴリーを表すという見方である。色彩そのものを客観的、物理的な存在として捉えるニュートンの光学研究などが、このような見方を支持する。

認知論とは、言語は心的イメージとしての色彩カテゴリーを表すという見方である。色彩を心理的現象として捉えるゲーテの残像、色順応などの観察分析や、ヘルムホルツなどによる神経生理学的な研究がこのような見方を支持する。

唯名論とは、言語は色彩カテゴリーを創出するという見方である。ソシュールの構造主義における言語恣意性の研究がそれを支持する。ソシュールの言語恣意性の主張には2つの側面が含まれる。1つは音声と意味の結合関係における恣意性で、もう1つは拡散連続体としての世界に対する人間のカテゴリー自体が言語や文化によって創出されるというカテゴリー形成の恣意性である。

以上3つの見方はいずれも色彩に関する部分的真実を述べたものと言える。

20世紀に自然言語における色彩カテゴリーの研究で、最も多く引用された文献の1つとしてパーリンとケーの『Basic Color Terms』(1969)を挙げることができる。パーリンとケーは唯名論的な見方に疑問を呈し、世界の

98にわたる言語の色彩語の調査に基づいて自然言語による色彩カテゴリーのモデルを一般化した。次のような色彩語彙の配列について、パーリンとケーは、ある言語において矢印より右側のカテゴリーを持っていれば、左側のすべてのカテゴリーも必ず持つという色彩含意関係の原則を立てた。

black	< red <	yellow	< blue <	brown <	grey
white		green			orange
					purple
					pink

その後、パーリンとケーの研究手法、とくに語彙選定の基準について疑問視する声や色彩の含意階層構造に対する支持、修正または批判的な研究が多く現われた。

社会言語学の立場から見ると、色彩語、色彩カテゴリーは、単にスペクトル的に変化する物理的または心理的現象を表現するだけでなく、人間が持つさまざまな社会的、文化的属性からも大きな影響を受けることが想定される。

2 色彩語と社会的属性とのかわり

『大辞林』によれば、日本語の「みどり」という語の意味は「青色と黄色との中間の色」を指し、「グリーン」という語彙項目では「みどりいろ」を指すと記述している。辞書の意味記述に限界があることは十分に理解できる。しかし、それにしてもこのような記述は漠然としすぎる。日本語話者にとって「グリーン」と「みどり」はどの程度の同義性を持っているか、つまり両者の彩度、明度、色相という3属性における分布状況、意味中核と意味範囲などにおいて本当にまったく同値なのだろうか。「グリーン」は「みどり」よりやや彩度が高いというようなことはあり得ないのだろうか。

外来語が日本語に入った時、外来の概念と共に入る場合と旧来の概念に対する新しい表現形態として導入される場合とがある。後者の場合、当然従来使われてきた和語や漢語との間に意味の指示範囲と使用者の社会的属性範囲において領域争いの現象が起きる。つまり「グリー

ン」が日本語に入った場合、それが「みどり」のすべての意味領域、日本語話者のすべての社会的属性領域において一気に「みどり」と同価の語として進入すると理解するより、意味領域における相互補完的な関係が生じたり、そのカテゴリーの同定過程において世代、年齢、性別、地域などの社会的属性による揺らぎ現象が発生したりするようなことを想定した方が、より合理的で真実に近いのではないかと思う。私は「グリーン」と「みどり」、「ブルー」と「あお」、「レッド」と「あか」、「グレー」と「はい」などの色彩語に対して、その意味領域の補完関係と社会的属性領域における揺らぎ現象に関する実証研究に取りかかろうと計画している。この研究を通して、辞書より遥かに正確な意味記述が可能となるだけでなく、その色彩語の意味変化の経路を観察し、外来語彙の進入による色彩語彙全体の構造的変化を明らかにすることができる。

そして、以上の調査データに基づいて、日本語と中国語などの多言語間の色彩語、色彩カテゴリーの対照研究も可能となる。

3 色彩語と民族文化とのかかわり

人間の色彩に対するスペクトルの認識、体系的な捉え方が一般化したのはかなり近代になってからのことである。古代社会において色は常に具体的な物と一緒に認識されていたと考えられる。色彩語、色彩カテゴリーの研究には、バーリンとケーのように具体的な物が伴わない色彩そのもののカテゴリーを対象とする研究が多いが、それが実際人間が持つ色彩の認知プロセスをどれだけ正確に反映したかは大きな疑問が残る。

発生的、語源的に見ると、人間社会の色彩語のほとんどは、直接、アナログに変化するスペクトルに対する概念化、カテゴリー化作業の結果として生まれたのではなく、具体的な生活環境、実際の身の回りの事物とのかかわりの中から生まれたものである。たとえば、上古中国語における色彩語「赤」と「藍」は、その文字・音声情報を迎れば、火や植物名と深いかかわりを持つことから、その色彩カテゴリーの形成に中国人祖先の生活形態、生活環境が直接反映されたことが分かる。

甲骨文字（紀元前16世紀頃）には蚕、桑、絹を表すことばが既に現われたが、色彩語彙にはまだ「黒（玄）、白、赤、黄」の4種類しか現われず、シルクと色彩語との間にはまだ関連性は見られなかったが、金文が現われた西周時代（紀元前10世紀頃）になると色彩語彙が大幅に増え、漢代（紀元前3世紀～3世紀頃）になると、一層豊かにな

り、シルク文化と中国人の色彩認識、色彩カテゴリーの形成との密接な関係が浮かび上がってきた。許慎の『説文解字』（2世紀頃）をひも解くと、当時の色彩語彙に糸偏の字が多く用いられたことが観察できる。

素（しろ） 綫（しろ） 緇（くろ） 絳（あか） 緋（あか）
 緋（あか） 緋（あか） 緋（あか） 緋（あか） 緋（あか）
 緋（あか） 紺（こんいろ） 緋（こんいろ） 緋（きいろ）
 緑（みどり） 紅（ピンク） 縵（ピンク） 紫（むらさき）
 縵（むらさき） 縵（オレンジ） 縵（こむぎいろ）
 縵（みずいろ） 縵（うすいきいろ）..

そして、これらの色彩語には、彩度、明度、色相だけではなく、材質感、光沢などの要素もかかわっているので、色によっては現代語では対応する語が見付からないほど細かく区分されている。これらの色彩語の形成には、古代中国のシルク文化と繊維染色技術の影響が色濃く反映されている。

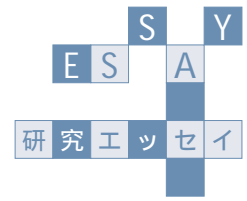
さらに、『説文解字』には色の異なる馬に対する語彙も豊富である。

驪（ふかいくろ） 駮（あかいくろ） 驪（あおいくろ）
 駮（あかしろ混色） 駮（混色）..

これらの語彙は、純粋な色彩語ではないが、色彩の意味素が主な弁別機能として働いている。このような色彩認識は中国の北方騎馬民族の生活環境、馬という動物が持つ色のバリエーションの制限を受けたものである。

色彩語や色彩カテゴリーが人間の生活環境、具体的な物とのかかわりで形成されるという考え方に立てば、バーリンとケーの色彩概念構造の規則がどれだけ普遍性を持つかは甚だ疑わしくなる。たとえば、染色技術上の制限や文化的嗜好などにより、purpleにあたる「紫」およびその下位色彩語があるのに、brownにあたる上位色彩語が存在しなかったり、馬のような具体的な物の色彩制限により色彩の含意構造における、ある特定の下位概念が目立って細かくカテゴリー化されるということは理論上十分に考えられることである。

私は現在以上の2つの研究テーマについて、資料の収集とパイロット調査の準備作業を進めているが、色彩語、色彩カテゴリーの形成に対する社会的、文化的属性による影響を実証的に解明することにより、色彩意味論、ないし一般意味論研究に新たな地平線が見えてくるのではないかと思う。



自然と人間、その関係の変移

田口 洋美 (COE共同研究員 / 東京大学大学院新領域創成科学研究科・博士課程)

1 はじめに

現在、日本列島の人口は約1億2,780万人であり、その歴史始まって以来の人口数の頂点にある。しかし、数年後には減少に転じることが明らかとなっており、100年後は約8～7000万人にまで減少すると予想されている。このため日本列島の自然は、現時点において過去に例を見ない人為的圧力による負荷を負っていると考えられる。近年の野生鳥獣に関する保護管理問題は、鳥獣保護と狩猟による駆除といった対立軸が明瞭となる中山間地域の問題として扱われがちであるが、このような問題は都市生活の繁栄や生活経済と無縁ではない。なぜなら、都市は野生鳥獣との関係が顕在化している中山間地域、近郊農村地域等を周辺に配する同心円の空間構造のなかで守られているといえるからである。仮に少子高齢化現象が現状のまま推移し、数年後に列島の人口数が減少傾向へと転じるとすると、中山間地域の廃村化現象と共にこの問題が都市周辺の近郊農村地域においても発生する可能性を有している。人口の減少が顕在化する中山間地域においては、若年層の労働力の低下に伴う耕作放棄、管理放棄される農耕地山林が増加傾向を示し、生態系の回復にはかなりの時間を要するとしても漸次自然(野生)の状態へと遷移していくことが予想され、すでに現実のものとなっている地域も散見される。

昨年、中部地方以西の日本海側で生じたニホンツキノワグマによる同時多発的な出没問題もこうした人為的圧力の低下後退と深く関わっている。中山間地域は、とりわけ戦後の高度経済成長期から若年層の人口流出にともなう世帯数減少、過疎化が叫ばれてきたが、バブル期以降は高齢化にともなう戸数減少、廃村化の動きが顕在化してきている。自然に対する人為的圧力の低下後退は、過去において人々が開拓し生活上維持管理されてきた耕地の荒地化・森林化を促し、これまで持続されてきたと考えられる人々と周辺の自然との緊張関係の崩壊を意味している。我々が今日目の当たりにしている中山間地域や都市近郊の農村地域の景観上の漸進的变化は、国土構

造の変革期を告げるものといってよい。そしてこの変化は私たち自身と自然の関係の変化をも意味している。

2 開拓の歩みと狩猟

日本列島は農耕化による開拓開墾によって拓かれてきた。湿地や潟を埋め立て、森林を伐り拓き、自然を人為的な空間に換えてきたのである。列島の農耕化は、それまでその場に生息していた野生鳥獣を追い払い、排除し、人為的空間から押し出す圧力を保持することによって達成され維持されてもきた。昭和6(1931)年、民俗学の創始者柳田國男は『明治大正史世相篇』のなかで次のように述べている。

野獣野鳥の物語が既にローマンスに化したといふことは、我々に取っては大きな事件であった。明治に生れて大正に老いた人たちは、大抵は眼のあたりに此推移の跡を経験して居る。《中略》鳩や雉山鳥も皆同じことだが、以前は動物社会には週期的の盛衰があつた。何か好い事情があると暫らくの間に繁殖し、やがて其害がひどくなつて盛んに捕獲せられ、忽ち減少してまた次の機会を持つたのである。それが或小鳥のやうに種も絶えるやうになつたのは、決して狩獵家と鐵砲のみの罪では無い。つまりは人間の土地利用が、追々彼等の生息を不可能ならしめて居たのである。ちやうど家々の鼠と同じやうに、言はゞ我々の敵意が強くなつたのである。しかも最近の狩獵制度が、それ以上に我々と鳥獣との間を、疎隔させたことも事実である。銃獵は結局他處の紳士たちの、税を拂つて楽しむ遊戯になつてしまつた。土地に生まれた者は其捕獲にすらも関係なくなつた。魚と蟲とはまだ友だちだが、鳥獣は追々に少年の興味の領分から逸出しようとして居る。天然記念物の保存法が、辛うじて其根絶を防止する以前から、彼等はもうとくに我々の「風景」の中に居ないのである(柳田 1963:233-234)。

現代、一般の人々の狩猟に対する理解は、狩猟が銃器

等を使用し野生鳥獣を殺傷する行為であるため、非日常的でしかも残虐で非人道的なものとして敬遠する傾向にあり、また列島の社会は農耕に依拠し発展してきた社会であるから狩猟という営みは異質なものであるとする見方すらある。しかし、列島において展開されてきた狩猟は、柳田國男が指摘したように農耕地の開拓史と深く関わりつつ、農耕と狩猟が相補的な関係を保つことで持続されてきたところにその特徴があると、筆者は考えている。むしろ農耕は、農作物に害をもたらす野生鳥獣の排除を前提として成立してきたとはいえ、狩猟は鳥獣害に対する抑止力として機能してきたと考えられる。ここでいう相補的な関係とは、見かけの上では矛盾しているかのように思われる二つの論理が、実は矛盾することなく互いが統一的に共存し補い合う関係を指している。狩猟と農耕という一見あい矛盾するような生業を統一的に共存させてきたのは、ひとえに自然の圧力（野生鳥獣の繁殖力や鳥獣が人為的な空間に進入しようとする運動など）に対抗しながら持続的で発展的な農耕を営んできた我々自身の生き方に他ならない。

近代の資本主義化、世界市場に組み込まれて以降、狩猟は捕獲する毛皮資源によって国際毛皮市場と強く結びつき、国家の外貨獲産業として奨励され、周辺国家との戦争関係のなかで軍用防寒毛皮の獲得を目的に管理されるようになる。その過程で、狩猟は農耕との関係を維持しながらも市場の需要に応えるための経済的行為、換金生業として、あるいは商業狩猟の道へと歩みはじめる。明治期においては北海道などの大規模な開拓開墾と本州などにおける干拓事業、火山地周辺の高標高部にあたる高原地域での開拓農村の形成などによって、より野生鳥獣とのせめぎ合いが表面化した地域においても農耕上の抑止力として狩猟の重要性が増していった。さらに、近代においてはこのような開拓開墾による農耕の拡大と野生鳥獣とのせめぎ合い、外貨獲得のための換金型の狩猟が連動するなかで、法制度の整備も進められてきた。

3 関係の変化

ところで、山形県高畠町在住の椿勉氏は、近年の野生動物の村里出沒問題の要因のひとつとして人間と犬との関係の変化を挙げている。1960年代後半から狂犬病や生ゴミを食いあらし伝染病の感染源となる恐れもあり、非衛生的であるとし飼犬には定期的な予防接種が義務づけられ、鑑札がつけられ、放し飼いは禁止されるようになった。各自治体がゴミの収集を始めるようになってか

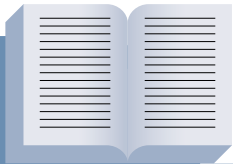
らは、どのような村であっても犬は鎖で繋がれるようになった。そして犬の役割はあくまでも番犬、または愛玩動物として人間の心を癒すことに重点が置かれるようになり、飼い主のマナーが問われるようにもなった。

ところで近世に書かれた紀行文などを見ると、村の周辺の田畑にイノシシやシカなどの野生動物から作物を守るために番小屋が建てられており、夜通し村人が小屋へ詰めて、田畑を監視していたことが分かる。そして番小屋には必ずといっていいほど犬が飼われていた。鈴木牧之の『秋山記行』は、文政11(1828)年に書かれたものだが、この中にも「小屋掛けは雪消え次第にかけ、休みところにいたし、七、八月時分イノシシ、サルノ類が沢山出て食い荒らすゆえ、昼は女、夜は男が番して、犬を連れておくに、獣さえ見ると吠え追ひゆくなり」という記事が見える。

近世から近代における犬の役割は、村から外部、周辺の野生へ向けられていた。犬たちの縄張り意識を利用し、人間の生活空間に進入して来ようとする野生動物を外へと追う役割が与えられていたのである。しかし、近世において長所として理解されていた犬たちの縄張り意識が、現代の社会では人間にも危害を加える可能性があるという理由で欠点として理解されるようになった。さらには、群をつくって行動する犬たちを引き離し、個別化することによって本来彼らがもっていた集団による力を解体した。人間の変化は、犬たちの長所を欠点に変えたのである。彼らは人間と野生との間に立って、ある時は狼の伴として、ある時は家畜を守るアシスタントとして、さらに家長の留守を守るために、絶えず人間生活の傍らで、その役割を果たした。高度成長期を端境期として、犬たちと人間の関係は変化し、徐々に野生動物たちも村里との間合いを詰めてきた。確かに野生動物の村里への出沒は、犬の問題だけではない。過剰な植林や自然林、二次林の喪失、高齢化、そして郊外の拡大など、その他幾つもの要因からなる相乗的なものであろう。しかし、犬の事例は人間の自然に対する認識のあり方が無意識のうちに変化してきたことを物語っている。人間と自然の関係を理解するためには歴史社会的コンテクストという視点が重要な意味を有することになる。

参考文献

- 柳田國男 1963(1931)『明治大正世相篇』
『定本 柳田國男集』第24巻 pp.127-414 東京：筑摩書房。
初出は朝日新聞社



Field Note

環境と民具 再び世界常民について



中村 政則 (事業推進担当者 / 神奈川大学大学院・教授)

オーストリア・チロル地方とベルリンの民俗調査

2004年9月、佐野賢治、木下宏揚、私の三人は、パンの生活誌や『アルプスの谷に亜麻を紡いで』(筑摩書房、1986)などの著作で知られる舟田詠子氏の案内で、オーストリア・チロル地方とドイツ・ベルリンの博物館をたずね回った。彼女は20年以上にわたってオーストリア民俗誌を研究しており、ドイツ人も驚くほどドイツ語に堪能である。舟田さんの通訳のお陰で、博物館長や音声研究所長などへのインタビューもすべて順調にいった。2週間近い調査行であったが、チロル地方の農家では昔ながらのパンの作り方を実演してもらった。グラーツ、リエントツ、インスブルックでは、4つほどの民俗博物館をたずねた。館長や案内人の説明を聞き、展示物をじっくり見たときには、オーストリア民俗学の伝統の厚さを実感した。さらにドイツに行き、ベルリンのヨーロッパ文化博物館をたずねた際には、舟田さんが我々の「非文字資料の研究」テーマをあらかじめ伝えてくださっていたこともあって、コンラッド・ヴァンヤ(Konrad Vanja)館長の話は、すこぶる興味深いものであった。とくにヨーロッパ文化博物館の創設者ルドルフ・ヴィクショウ(Rudolf Virchow)の説明を聞いたとき、私はルドルフの博物館にかけた情熱、理念に感銘を受けた。

ルドルフは民俗学者であると同時に、医学者(解剖学)でもあった。彼は「人間と自然を統一した宇宙」を理想の世界とし、健康と自然環境を一体とした学問を創ろうとした。ルドルフは、貧しさが病気を生むと考え、人間はどこに住み、どこに寝て、何を食べているかを調べた。また人々は何を使って仕事をしているか、いろいろの工芸品、民具を集めた。たとえば小麦やライ麦を刈り取る場合、平らな畑では長い柄の鎌を使うが、傾斜の急な畑では短い草刈鎌を使う。要するに「環境に合わせて道具がある」というのだ。次に道具の装飾は地方によって違う。皿、花瓶、コーヒーカップにしても、チーズ作りの箱や曲物の弁当箱にしても各地域に特有の模様があしらわれている。同博物館では金持ちのユダヤ人から資金を

提供してもらって、各地の民具を体系的に集めたという。こうしてルドルフは「文化の表現としての道具」という考えにたどりついた。

医者でもあったルドルフは次に病院をつくった。院内感染に一番気を使ったという。次いで政治家にもなった。一般的にいうと学者は研究・分析はするが実践を伴わない。自己の理念を実際政治の場で実現しようというのであった。

ルドルフの死後、博物館に比較の方法が入った。それまでは異国趣味からトルコや中国などから古い陶器や珍しい人形を集めたりしていたが、19世紀に入って、田舎と一般の人びとへの関心が強まった。民具収集の動機は工業化、産業革命で次第に消えていってしまうものも集めたが、ただ旧いからというのではなく、普通の人が日常的に使っているものを集めた。民俗衣装についても、祭礼のときに着るものよりも、労働着を集めた。博物館が大きくなるにしたがって、保管していくものが増えていった。カタログの作成が複雑になり、紙製品・木製品・ガラス製品・金属製品など素材別にカタログを作成し、保管についても素材別に保管する方法を考えた。それが今日まで続いているという。

ヴァンヤ館長の話聞いた後、我々は2時間近くにわたって、収蔵庫を丁寧に見せてもらったが、これが実にすばらしい。皿、花瓶、コーヒーカップ、人形、ワッパ、ガラス製品などが地方別にきれいに保管されており、地方別の比較がわかるようになっていた。収蔵ケースは、特注ではなく、市販のケースを購入したという。保管物が増えても簡単に買い足すことができるから、というのであった。今まで私は参観者として外から博物館を見ることは何度もあったが、内側から博物館を見るのは初めてであった。以上の見聞は、その後、日本の博物館や民具の収蔵ぶりを見るときに参考になった。その具体例を次に記しておきたい

福島県只見町の民具

2004年6月と11月、我々第4班のチームは福島県南会津

郡只見町をたずねた。同町には8,000枚以上の民具カードが保存されている。しかも、それらのカードは只見町教育委員会や地元の民俗研究家の指導の下に、地域住民が一体となって作成したものである。住民参加の民具の収集と膨大なカードづくりは全国でも珍しく、『福島民友』や『読売新聞』福島版に何回か取り上げられた。我々が調査に入った時にも『福島民友』(2004年6月18日)が早速記事にした。

全国でもめずらしい住民参加の民具収集とカードづくりがなぜ可能になったのか。飯塚恒夫氏(昭和9年生、当時、社会教育主事)は、その動機を次のように語った。「昭和39年に文部省主催の研修があり、民具分類の体系化したハンドブックを作った人の話を聞いた。この分類なら我々でもできると思った。普段何気なく使っている民具が学問の対象になると知って感動した。当時は高度成長期で、農家の改築ブームがおこり、古い家が次々と取り壊され、民具がどんどん捨てられたり、焼却された。また昭和44年8月12日、只見町に未曾有の集中豪雨が襲い、民俗資料が散逸した。今なら間に合う。町史編集室が中心になって、民具の収集・整理が始まった」。詳しい経過は省くが、この呼びかけに応じて、古老や主婦たちは民具を集め、洗ったり、刃物のさびを落としたりして民具を整理し、2年がかりでカードを作った。

私たちは住民側のリーダー横山哲夫(大正14年生、79歳)、馬場惇(昭和6年生、73歳)、渡辺幸生(昭和8年生、71歳)三氏から、2回にわたり合計7時間前後の聞き書き

を行ったが、そのとき三氏は「民具が生き返ってきたなあ」「民具が語りかけてくるようだった」という印象的な言葉を述べた。また会の名称を「只見の民具を語る会」ではなく、「只見の民具と語る会」としたのも、そのためだと言った。このカード作りとその資料化については、網野暁氏(COE研究員・PD)が年報第2号『人類文化研究のための非文字資料の体系化』(2004)で書いているので、むしろここでは夏のヨーロッパ民俗調査と只見調査との関係に絞って、私見を述べておきたい。

それは、ベルリンのヨーロッパ文化博物館長コンラッド・ヴァンヤ博士から聞いた「環境に合わせて道具がある」「文化の表現としての道具」という言葉である。私はこの言葉が気に入っていて、先ほどの三人にも、この話を伝えた。これを聞いた馬場惇氏と新国勇氏(只見町教育委員会)が、自然を大切にする先祖の知恵について語ってくれた。以下はその一部である。

「今の人は自然を征服するといって色々なことをやっているが、昔の人は自然を恐れ、自然に逆らうようなことはしなかった。自然に合わせて道具をつくったものだ」。たとえば、くわ(鍬)の柄をつくるにも、木の枝を利用して一本の木で鍬の柄をつくった。これをクワガラというが、木釘でつないだ鍬と違って丈夫で長持ちした(写真1)。二股の木を利用して、脱穀や豆落としに使うマオトリ(写真2)を作ったり、三またの木を利用して農具のカツアボウ(写真3)を作ったのも先人の知恵だ。

豪雪地帯のこの地域では、カンジキは無くてはならな

写真1

クワガラ〔鍬柄〕
(台)長さ:33.0cm 幅:13.0cm
(柄)長さ:88.0cm
これに野鍛冶で作った鍬先をはめる。柄の勾配と太さは自分の体にあわせて木取りをする。



写真3

カツアボウ〔カツア棒〕
カノ(焼畑)で刈り払った草をかきあげる。カクサボウとよぶ地域もある。



写真2

マメオトシ〔豆落し〕
長さ:55.0cm 幅:13.5cm
大豆、小豆、ソバなどの雑穀類を脱穀する。マトウリとマドリとよぶ地方が多い。





履物だが、降ったばかりの“ぼほ雪”(新雪)は柔らかく腰までつかるので、大きなカンジキを履いて道を踏み固めなければならない。これをツルカンジキという(写真4)。ところが雪が固まってくると堅雪は危険なので、滑り止めを付けた小さな丸カンジキを履いて歩く(写真5)。これは現在でも同じである。また雪の多い只見地方ではブナや杉の木が雪圧で根元から曲がっている。これをネマ加里(根曲がり)というが、農民たちはこの根曲がりの木を利用して、コウガイやモミヨウシボウという道具をつくった(写真6)。耨押^{のぎ}しや芒おとしに使われた。鋤の刃の付け方にしても、農地の斜面に応じて、角度を変えた。まさしく只見町の農民は昔からドイツの農民と同じく「環境に合わせて道具をつくっている」のだ。これは私にとって新鮮な驚きであり、発見だった。

世界常民

私は本誌第4号で、「雲南省で考える」という短い文章を書き、世界常民という言葉を使った。その主旨は、雲南省博物館の民具・装飾品や写真などの展示を見ているうちに、「世界中どこの民衆も同じことを考え、同じような道具を作るものだ」という実感を抱いたからにはほかならない。11月のオーストリア調査のとき、グラーツの野外民家博物館で唐箕^{とうみ}を見つけたときに、正直言って、私は「あっ」と驚きの声を上げた。神奈川大学の歴史民俗資料学研究科の内藤大海氏(2004年度「日本における唐箕の発達」で学位取得)から、よく唐箕の構造や技術的発展の話聞いていたので、私の関心も自然と唐箕に向かっていたのである。よく見ると、オーストリアの唐箕(写真7)と日本の唐箕は外見も仕組みもほとんど変わらない。ちなみに、同じ4班の橘川俊忠氏がフランスの博物館で撮影した唐箕(写真8)は、内藤氏によると江戸時代の農書「農術鑑正記」にある「篩付の唐箕」によく似ているという。このタイプは近畿地方に分布しており、国立民族博物館の近藤雅樹氏は「近畿の半唐箕」として纏めている。内藤氏は、この唐箕は一番口のみで一番口が本体の底部に開口しており、中国、タイの唐箕にも存在するという。

では只見地方の唐箕はどうかというと、(写真9)のように民具カードには次のような説明文が付いている。書いたのは、先述の住民側リーダー横山哲夫氏である。

「穀類の選別用具で、粳、粟、ヒエ、そば、大豆、小豆など上の口から入れ、右手で把手を廻して風を起こし、穀物を選別する。正常なものは手前の口から、不成熟な

ものは向こう側の口から落ちる。ごみやちりは前方の口から吹き飛ばされる。」

学者が書く文章よりやさしく的確である。しかもこの説明文はオーストリア、フランス、中国の唐箕にもほぼそのまま通用すると言っていいだろう。「世界中どこの民衆も同じように考え、同じような道具を作るものだ」という私の感慨は、唐箕についても当てはまるのである。他方、ベルリンの博物館収蔵庫で見たワツパ(弁当箱の一種)にしても、木製・竹製の違いがあるとはいえ、新潟県蒲原や岐阜県飛騨で見たワツパとほぼ同じ形状をしている。まさしく民衆レベルで考えると、先進・後進もないのである。日本の歴史や民俗の研究で、「この技術は西洋や中国から伝わって来たもの」という技術伝播論がよく使われるが、本当にそうなのだろうか。雲南省、ドイツ、福島県只見調査で得た知見から判断すると、そういう常識自体まず疑ってみたほうがよさそうである。

「必要は発明の母」という言葉があるように、民衆(農民、大工、職人、鍛冶など)は生産や生活の必要から、我々が想像もできないような創意・工夫を発揮していく。これは民族や国境の違いを超えて、あるいは農業、漁業、山稼ぎなど生業の違いを超えて当てはまる人類の智慧であるまいか。

私は、世界は先進・後進もなく、どこも同じ式の「文化相対主義」の立場を表明しているのではない。むしろ近代科学技術や近代学術の面での先進・後進の違いはやはりあると思っている。しかし、民衆や常民レベルでも先進・後進があると思うのは、知識人の独りよがりではないかと考えるようになった。

柳田国男は『民間伝承論』(1934)の中で、世界民俗学という言葉を使った。一国民俗学を確立してのちに、世界民俗学に向かおうという提言であったが、未完に終わった。しかも、柳田のいう世界民俗学は、いわば比較伝承学であって、世界民具学あるいは比較民具学でもない。また世界常民という言葉は、柳田にはない(佐野賢治氏の教示による)。

私の「環境と民具」の研究は、始まったばかりであって、今後何処へ向かっていくかは分からないが、「環境に合わせて道具を作る」という生活の知恵は、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、南米、北欧など世界各地にも見出されるはずだ。そこにはどのような同時性、共通性、差異性があるのか、知りたいと思う。



写真4

ツルカンジキ
 長径：63.0cm
 短径：34.0cm
 輪は地竹、フリオは藁・麻
 などで出来ている。



写真5

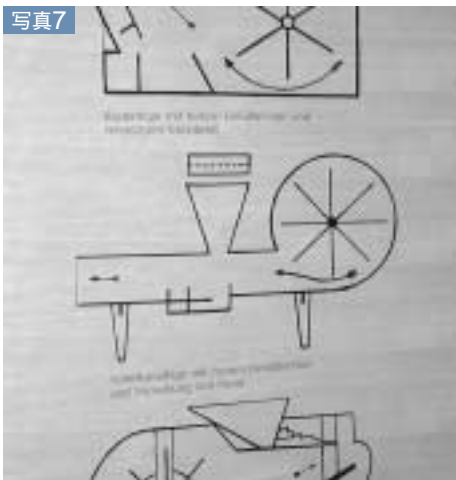
マルカンジキ
 直径：33.0cm
 新雪の歩行及び雪道踏みに
 使用する。



写真6

モミヨウシボウ〔籾ようし棒〕
 センバで扱った穂切れや、籾につ
 いている芒(のぎ)を打ち落とす。

写真7



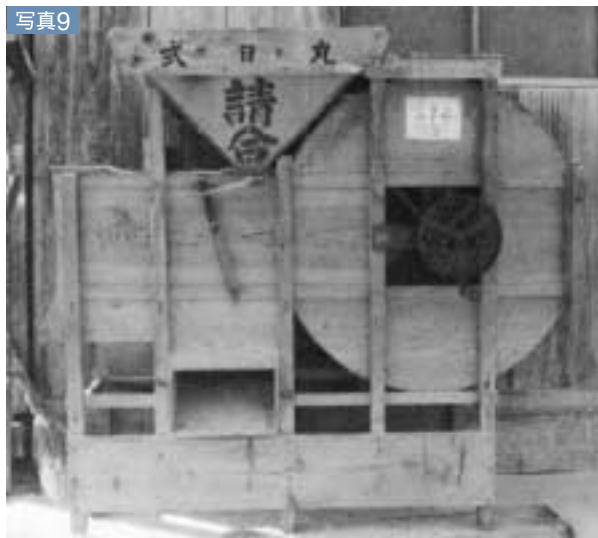
唐箕の概念図(オーストリア・グラーツ
 シュテューピング野外博物館蔵)

写真8



唐箕(フランス・カーン ノルマンディ博物館蔵)

写真9



唐箕(只見町梁取)

鷲山義雄著『会津の民具』より



博物館・美術館・ 大学図書館・暴力のあと

富澤 達三 (COE研究員・PD)

はじめに

2004年2月22日から28日まで、第3班の北原系子氏・原信田實氏とともに、アメリカの災害景観に関する社会認識調査を主な目的とし、スミソニアン博物館、ブルックリン美術館、ワールドトレードセンター跡地などを調査した。以下、印象に残ったいくつかの施設について述べてみたい。

1 ワシントンにて

<スミソニアン博物館> アメリカの博物館・美術館や大学には、資産家からの莫大な寄付がおこなわれていることが多い。スミソニアン協会が運営する、博物館・美術館・動物園など16の施設よりなった、スミソニアン博物館はその代表である。

研究機関としても知られるスミソニアン協会は、1846年に科学者のジェームズ・スミソンが寄贈した莫大な資金によって設立された。惜しげもなく莫大な財産を寄付し、富の還元を行なうことも、アメリカンドリームの一つの典型なのだろう。日本の企業家たちとのスケールの違いには、ただただ驚くばかりであった。以下では系列の2館を紹介する。

国立アメリカ歴史博物館は、アレキサンダー・ベルの電話機やトーマス・エジソンの蓄音機・電信機など、アメリカの生んだ独創的発明がひとつの目玉となっている。そのほかに、かつてNHKで繰り返し放映されていた『大草原の小さな家』を思わせる開拓時代の民家、アメリカの歴代大統領の展示も目をひいた。

大衆文化・サブカルチャーの展示も力が入られ、エルビス・プレスリーのステージ衣装、スーパーマンのコスチュームなどの展示があった。近年、日本の博物館でもサブカルチャーに関する展示が行なわれつつあるが、総じて概説的なものが多い。しかしながら、充実したモノ資料を示し、特定のサブカルチャーがどのような歴史的文脈で形成され、地域や個人がそれをいかに享受し影響を受けたのかが明らかにされれば、近現代展示の新たな可能性が拓けるだろう。

アメリカ自然史博物館は、質・量ともに充実し、特に災害関係の展示を重点的に見学した。地球上のプレート構造、震源分布などがビデオ・CGなどで展示されるが、地震国である日本と異なり、地震災害に関する展示は簡略。各国の地震災害として阪神大震災の被害写真も紹介されていた。

2 ニューヨークにて

<ブルックリン美術館・コロンビア大学> ここでは、歌川広重『名所江戸百景』を熟覧した(写真1) いずれも状態の良い名品で、原信田氏の『名所江戸百景』には、安政江戸地震(1855)の破壊から復興する江戸を描いた作品が多い」との新説の実証に、大いにプラスとなったようである(原信田實・北原系子「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、2004、参照)

ブルックリン美術館調査後、コロンビア大学に原信田氏旧知のヘンリー・スミス教授を訪ねた。同大学には東洋関係の文献を集めた専門図書館があり、見学する。我々のような、たまたま立ち寄った外国人研究者でも、自由に図書館に入って本の閲覧が出来た。近年は改善されつつあるが、日本の大学図書館では、紹介状が無ければ閲覧はおろか入館すら出来ないことがあり、その差を痛感する。図書館の一階ホールでは日本の大衆文化の紹介として、『ゴジラ』シリーズのポスター展示が行なわれており、意外なことにそれらも図書館の所蔵品であった。

<メトロポリタン美術館> 収蔵品は500万点を越えるともいわれる世界屈指の美術館である(写真2)。日本語によるオーディオガイド・展示ツアーがあり、当然日本語版パンフレットもある。これは館全体の見取り図と各展示の概略を説明した簡便なもので、初心者はこれを手がかりに選び抜かれた展示品を見ていくのが良いだろう。

<エンパイアステートビル> 毎年350万人を超える観光客が訪れる、ニューヨーク観光のメッカ。アメリカを象徴する建造物でもあり、1986年には重要文化財に指定された。102階建て443mの高層ビルだが、1931年にわず

か1年2ヶ月弱の工期で完成している。

有料エレベーターで102階の展望台に着くと写真撮影に誘導され、頼みもしないのにシャッターを切られた。有料とは知らず、キャピネサイズ1枚20ドル近くもして、まんまと儲けられてしまった。

展望台からの眺めはまさに絶景。生来高い所好きの私だが、どうも落ち着かない。エンパイアステートビルは当時の最新鋭技術が結集された、堅牢な建物であるが、ニューヨークは地震が少なく、日本のような免震構造に工夫を凝らした建物では無いように思えたからである。

<ツインタワー跡> 2,500人以上が亡くなった人災の跡地は高い柵に囲まれているが、中は柵の間から見る事が出来る。内部は、十字架状に残った瓦礫が保存される以外、雑然とした工事現場となっている(写真3)。

ツインタワー崩壊のあおりで周囲のビルのいくつかは未だ工事中であった。観光客を目あてにしたツインタワーのミニチュア模型を売る露店や、9.11事件の写真集を

売る男性もあり、事件が過去のものでないことを知らされた。今後も年ごとの鎮魂行事やモニュメントの建設が行なわれるであろうが、日本の地下鉄サリン事件(1995)同様、何故テロが引き起こされたのか、どのようにすれば再発を防げるのかについて、根本から考えねばなるまい。

おわりに

今回の調査では、アメリカの博物館・美術館、そしてテロの跡地から、さまざまな「ちから」を感じた。それらは、社会的成功者の莫大な財貨の力であり、大切な展示品を出身や言葉の異なる人々に理解してもらおうと奮闘する力である。そしてまた、長年にわたる政治的圧力へ肉体言語を以て己の信じる正義を突きつけた暴力であり、そのような理不尽な暴力に対し敢然と異議を唱えた、小さいながらも数多くの力(写真4)であった。

私にとっては初めてのアメリカ滞在であったが、異国の社会が放つ圧倒的な「ちから」を、まさに全身に感じとることが出来た。

写真1



『名所江戸百景』の熟覧調査(ブルックリン美術館)

写真2



メトロポリタン美術館

写真3



ツインタワー跡地に残る「瓦礫の十字架」

写真4



ツインタワー付近にて

写真はすべて原信田貴氏撮影。



北京 改革開放が生み出す景観

藤永 豪 (COE研究員・PD)

昨年の冬、海外派遣により、私は北京師範大学民俗学と文化人類学研究所を訪ねる機会に恵まれた。約2週間にわたって、北京市中心部と郊外の農山村をまわり、その景観を観察した。

今、中国は著しい経済発展を遂げている。改革開放政策のもと、沿岸地域と内陸地域の経済格差が顕著化しながらも、北京や上海などの大都市やその近郊の農山村では、住民の生活水準が一気に向上し、地域の景観も大きく変貌している。

写真1は北京の繁華街の一つ西城区西単である。カラフルな広告ときらめくネオン、若者で込み合う雑踏。今の北京の急成長ぶりが窺える。写真2は西城区徳勝門付近における再開発の様子である。近代的な高架道の向こうにマンションが見える。その間は空き地となっている。かつては四合院が集まり、古い町並みを残していた。路地では子どもたちが遊び彼らの笑い声が響く中、母親たちが世間話に夢中になっている、そんな風景が見られたはずである。今は取り壊しを待つ古ぼけた民家が数軒残るだけである。スクラップアンドビルドによる大規模な破壊と創造、その景観を目の前にした時、白黒のフィルムの中でしか見たことがなかった、かつての日本の高度経済成長を、カラー映像で見ているような奇妙な心持ちになった。現地での案内役を引き受けてくださった方の1人が「生活は良くなったけど、北京らしさが、老(ラオ)北京がどんどん消えてしまっていくようで淋しい。」と漏らされたことを思い出す。伝統と現代、この2つがせめぎあう現場とジレンマを北京の景観の中に見た気がする。

ただし、一方では、そんなノスタルジックな感傷を吹き飛ばすような景観も存在した。そこは北京市中心部から南西へ約40kmのところにある韓村河鎮である。中心部には鉄筋コンクリート製の2階建ての住宅が建ち並び、その脇にはこれまた洒落たマンションが林立している(写真3)戸建ての住宅群は村が建設した村民専用のもので、日本のように外部資本が販売目的に造成したものではない。逆に隣接するマンションは都市部の労働者や引退者向けに販売されている。開発主体はやはり韓村河鎮である。

また、広大な公園も造られ、その中にはスワンボートが浮かぶ人工池があり、数本の橋が架かっている。何故か実物の戦車や飛行機までもが置かれていたりする。「これが農村なのか!？」、驚いていたのは私だけでなく、同行していただいた2人のチューターも、目を見張っていた。ごくありふれた農村だった韓村河は(写真4)、建築関連の郷鎮企業を立ち上げ、近年の都市開発の波に乗り急成長を遂げた。その後、不動産事業にまで手を広げ、マンション販売をも始めたわけである。現在ではほとんどの住民が農外就業者である。韓村河は最も成功した農村として注目を浴び、江沢民元総書記が視察に訪れたほどである。未だ貧困に喘ぐ内陸の農村とは対照的な、極端な例かもしれない。しかし、「改革開放」、「社会主義自由経済」など、中国独自の政治路線が生み出した韓村河の景観を見た時、私は初めて現在の中国を肌で感じた気がした。それは予想もしなかった村の景観を見たからかもしれないが、このとてつもない変化が中国の今の実情を明確に示しているのは間違いない。

この他にも、明・清代の街並みを保存し、観光開発に成功した村や廃村・移転が決定・実行された村など、北京の景観は、私にその多様な表情を見せてくれた。今回の海外派遣を機に、中国研究に本腰を入れて取り組んでいきたいと思う。



西城区西単のデパート



西城区徳勝門からみた再開発の様子



房山区韓村河の景観



開発前の韓村河の景観
(韓村河鎮資料を接写)

大衆文化の視覚イメージにおける記憶の伝達

尹 賢鎮 (延世大学校中央博物館学芸員)

大韓民国全羅北道群山市には1923年造の‘朝鮮銀行’の建物がある。この建物は当時の京城(現ソウル)以外の地域では、目にすることができないほど立派な建物であったという。この建物の設計者は第一次世界大戦(1914年)中、捕虜になったドイツ人で、施工者は中国人であった。このこと自体が当時の東北アジアの政治状況を物語っている。以前、記録写真を撮るためにこの建物に立ち寄った際、私が目にしたのは舞踏場としてすっかり様変わりし、撤去直前という状況にあるその建物であった。この時の記憶から私の日本研修は始まったのである。

今回の日本研修中、私は‘記憶’という一つの単語に始終、悩んでいた。大衆文化の視覚イメージを研究する者として私は、その時代を生きた人々と、その時代の人々の日常生活を特徴づけた視覚イメージとの相関関係に注意を払ってきた。基本的には、大衆のもつ視覚イメージは、個々人の自由な趣向によるものではなく、他者の視線を意識する個人によって構成された集団的選択である。それはその集団を導く少数の権力者によって選ばれたものが主である。そのため、大衆視覚のイメージが作り出される過程を反対側から観察してみると、その時代を動かしていた権力の、抽象的ではない具体的な姿を見出すことができるわけである。

私は横浜にある‘赤レンガ倉庫’を見ながら、過去の建築空間の記憶が今日まで受け継がれている柔軟な姿勢に、漠然と羨ましさを感じた。大正時代の港町にあった平凡な建物が今の時代に自然に溶け込んでいることも驚きであったが、それを可能にした‘記憶の選択過程’がさらに羨ましかったのである。同様に‘日本丸メモリアルパーク’を訪れた時には、私は「日本人よ、あなたたちはなぜこんなに記憶に繋がる近代の風景を多く残しているのか」としか言い様がなかった。

他人の見た幸せな夢の話聞いても、その夢は自分のものにはならない。言うまでもなく夢は各個人の経験が違う形で現れるからである。結局、記憶も同じ原理で、自分と他人が分離されるものである。自分の空間にいくら優れたものが持ち込まれても、それが自分の意思でない場合には、自分の記憶とは無関係な形で位置づけられるだけである。

明治43(1910)年に始まり、大正を経て昭和20(1945)年に至る間、韓国人は、他人の記憶を移植されてきた。それこそが前述の朝鮮銀行に対し人々が愛情をもって記憶することができなかった根本的な理由であろう。寸法の合わない服を着て楽に感じる人がいるだろうか。

一方、現在横浜にある建物はその当時を生きた日本人の創造物であり、日本丸もその当時の日本人の記憶を伝える文化遺産である。こうした記憶が受け継がれているという事実だけでも、韓国から来た私には、現在の日本人が羨ましく感じられたのである。

わたしが学芸員として勤めている延世大学校中央博物館は、学校教育事業の一環として1929年にソウルに設置された。その後大学創立百周年を機に記念館が建てられ、常設展示室を始めとした施設が設けられ、現在は韓国の大学博物館において最大規模の総合博物館として発展しつつある。

博物館の主機能は、‘人々の共通の記憶’を保管・記録・展示する場所だと思うが、今回の日本研修によりもう一つの要素を加えることができた。それは‘記憶の発見’である。博物館の仕事とは、具体的な時代の区分と遺物の発掘にある。一方、‘記憶の発見’とは、より‘有機的’且つ‘相対的’な立場で歴史を顧みることを意味する。今後、それは‘記憶喪失の時代’を生きた近代の韓国人達を研究する上での基本的な姿勢となるだろう。

旅先で‘違い’を発見するのは当然だが、その違いによって自己発見ができたなら、よりラッキーなことだ。今回、こうした幸運な時間を与えてくださった神奈川大学21世紀COEプログラムと、関係者の皆様に、感謝の言葉を申し上げたい。

(尹 賢鎮氏は2004年12月6日~19日、訪問研究員として来日された。)

印刷博物館の図録「西洋が伝えた日本 日本が描いた異国」の表紙
(2004年9月11日~12月12日開催)





中国民俗界の「東方明珠」

華東師範大学中国民俗保護開発研究センターの紹介

毛 巧輝（華東師範大学民俗学専攻院生）

このたび神奈川大学COEプログラムの招きにより訪問研究員として来日した。短い期間ではあったが、日本における民俗学を多少なりとも理解することができたと思っている。今回の本コラムでは、私の所属する華東師範大学を紹介し、お互いの理解と交流を深めるきっかけになれば良いと考えている。

華東師範大学は中国最大の都市・上海市内にあると同時に、上海を中心とした呉越文化地域の中に位置する。もとは大夏大学と光華大学を母体とし、復旦大学と同済大学などから一部の学部や学科を取り入れ、1951年10月に大夏大学があった場所に建てられた。

1980年以降、中国教育部と上海市の共同で再建設され（主に『九五』²『十五』³『211工程』⁴などの国家計画による）、教育学科だけではなく、社会学科、人文学科、自然科学、管理科学科などの複数学部を持つ総合師範大学へと転身した。母体の一つであった大夏大学は、民俗学において1930年以降の伝統があり、民俗資料が豊富な地域に位置していたことから環境的にも優れていた。華東師範大学もこの伝統を受け継ぎ、1980年代から民俗学に力を入れてきた。そうして民俗学の研究と教育は国内外において重要な位置を占めるようになり、この何年間には新たな民俗学科の設立などを経て、民俗研究において著しい成果をあげている。

「華東師範大学中国民俗保護開発研究センター」は、2002年3月15日華東師範大学「華師2002年15号批文」により成立した独立機関である。センターにおける研究の趣旨は、国連教育文化組織の「伝統文化と民俗の保護」公約の要求に応じ、中国の民俗伝統と文化遺産の保護と開発のために貢献することである。

現在では、伝統文芸・古城・民家・結び紐・チャイナ服などの中国民俗が内に秘めた文化は、中国の経済発展と世界文化の波に乗り、世界文化遺産に登録されるなど、自国民と世界の人々に注目されつつある。一国の民俗文化はその国の経済成長と先進的文化建設に巨大な作用をもたらす、伝統と現代化の歩みよりを証明するものである。

しかしながら、我が国では今でも、人々の民俗に対する科学的な認識が不足しているため、高度経済成長の中で我が国の民族の特徴を表す民俗文物や民俗習慣などは不公平な待遇を受け、攻撃され、破壊されてきた。早急

に救出し保護しないと消滅してしまう危険があり、優れた中国民俗の開発と保護作業は一刻を争う状況にまでなっていた。

こうしたことを背景に、当研究センターは中国民俗の開発と保護を目的として設立されたのである。中国においては早期に設立された学術研究機関で、民俗研究において優れた環境に恵まれている。理論と実践の結合を模索し発展させるために思考し続け、設立以来、積極的に中国文化遺産の調査と収集に力を入れている。寧波、山海関、重慶磁器口、福建省和平鎮などの地域の非物質文化の保護と収集をし、フィールドワークと比較分析の方法を用いて民俗研究を行なっている。そして中国四大伝説の一つである「梁山伯と祝英台」伝説についての保護と調査を行ない、全国的に影響を及ぼしている。

当研究センター長陳勤健教授は、1970年代末から浙江省の農村地域においてフィールドワークを始められ、20年余りの調査活動の中で、この地区の民衆伝統文化を深く研究されてきた。その豊富な研究成果により、中国で権威のある数々の賞を受賞されている。1988年からは日本（東京大学、筑波大学、神奈川大学、新潟大学、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター）、アメリカ（サンフランシスコ大学）、ロシア（モスクワ大学、ゴルカ世界文化研究所）、オーストリア（モルボン大学）などの諸外国の大学や政府機関と学術研究交流を行なうなど国際的に活躍されている。

こうしたことを背景にして、華東師範大学民俗学専攻は長く培われた伝統と新しい歴史環境の中で、さらなる発展を遂げているのである。

（毛 巧輝氏は2004年12月12日～25日、訪問研究員として来日された。）

1：「呉越」は周朝国名、呉は今の江蘇省南部と浙江省北部を、越は今の浙江省東を指す。

2：中華人民共和国国民経済、社会発展の為の第九回「五年」(1996～2000年)経済計画を指す。

3：中華人民共和国国民経済、社会発展の為の第十回「五年」(2001～2005年)経済計画を指す。

4：中国政府が21世紀において100の大学と学科を重点的に建設する大プロジェクト

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2004年12月～2005年2月）

タイトル	発行所
Takeuchi Keiichi 『japon : un autoportrait』	Editions Flammarion
竹内啓一ほか編 『20世紀の地理学者』	古今書院
竹内啓一著 『伝統と革新』	古今書院
竹内啓一著 『地域問題の形成と展開』	大明堂
竹内啓一編著 『都市・空間・権力』	大明堂
ポール・クラヴァル著 『現代地理学の論理』	大明堂（竹内啓一氏寄贈）
帝国書院編 『地図で見る昭和の動き』	帝国書院（竹内啓一氏寄贈）
京都国立博物館編 『日本人と茶』	京都国立博物館
京都国立博物館編 『古写経』	京都国立博物館
김 동걸 ほか著 『통신사, 한·일 교류의 길을 가다』	조선통신사문 화사업추진위원회 경성대학교한국학연구소
조선통신사문 화사업추진위원회（부산시）編 『2003 조선통신사 한·일 국제학술심포지엄』	조선통신사문 화사업추진위원회
조선통신사문 화사업추진위원회（부산시）編 『2004 조선통신사 국제학술심포지엄』	조선통신사문 화사업추진위원회
조선통신사문 화사업추진위원회（부산시）編 『2003 조선통신사 한·일 문화교류사업』	조선통신사문 화사업추진위원회
조선통신사문 화사업추진위원회（부산시）編 『2004 조선통신사 한·일 문화교류사업』	조선통신사문 화사업추진위원회
『마음의 교류 조선통신사（朝鮮通信使）』	조선통신사문 화사업추진위원회
조선통신사문 화사업추진위원회（부산시）編 『조선통신사 朝鮮通信使 Journal Vol.1～6』	조선통신사문 화사업추진위원회
朝鮮通信使文化事業推進委員會（釜山市）編 『2003 朝鮮通信使 韓日協議會 交流總會』	朝鮮通信使文化事業推進委員會 （조선통신사문 화사업추진위원회寄贈）
국립진주박물관 編著 『斗庵 金龍斗 蒐集文化財』	통찬문화사（國立晋州博物館寄贈）
Fernando Carlos Chamasほか著 『Estudos Japoneses』	Universidade de Sao Paulo
王榮国ほか著 『閃光的足跡』	北京図書館出版社（遼寧省図書館寄贈）
『ICCS NewsLetter』 No.4、5	愛知大学国際中国学研究センター
拠点形成概要	大阪大学大学院医学系研究科 21世紀COEプログラム 「細胞・組織の統合制御にむけた総合拠点形成」
第1回国際シンポジウム抄録集	京都大学21世紀COEプログラム 「病態解明を目指す基礎医学研究拠点」
『中間成果報告書（平成14・15年度）』	筑波大学21世紀COEプログラム 「健康・スポーツ科学研究の推進」
言語情報学研究報告3「コーパス言語学における構文分析」 言語情報学研究報告4「通言語音声研究 音声概説・韻律分析」 言語情報学 第1回言語情報学国際会議報告集「言語情報学 現状と未来」	東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
『Wind Effects Bulletin』 No.3（英文）	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
『NewsLetter』 No.3、4	一橋大学21世紀COEプログラム事務局 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
『世界の中の日本』（研究報告第5集2004） 『年報2003』	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」



研究業績一覧（著書、学術論文、その他）

掲載した業績は、『年報』・『調査研究資料』など、2003・2004年度を中心にしたCOE関連の論文です。

*なお、『年報』と『調査研究資料』は、本プログラムが刊行した『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』、調査研究資料1『環境と景観の資料化と体系化にむけて』をそれぞれ略称したものです。

1班

福田 アジオ	「歴史のなかの民俗・民俗のなかの歴史」『歴史民俗資料学研究』第9号、35-43、2004年 「生活画像資料と文献書誌データベースの作成」『年報』第1号、6-12、2004年、 「画像資料としての素人絵 生活絵引き編さん資料としての可能性」『年報』第2号、1-16、2004年
菊池 勇夫	「荷を負うアイヌの姿 菅江真澄の絵から」『年報』第1号、13-19、2004年 「鷹の捕獲技術について 江戸時代の北日本を中心に」『年報』第2号、110-124、2004年
君 康道	「東京大学AIKOMの現状」『IDE 現代の高等教育』第453号、民主教育協会、27-32、2003年
金 貞我	「申潤福筆『蕙園傳神帖』について 朝鮮時代の風俗画にみる女性像」『年報』第2号、17-35、2004年
小馬 徹	「「さかい」の論理と「あいだ」の論理 言語の人類学的側面」『歴史と民俗』第20号、49-78、2004年、 「ケニアの勃興する都市混合言語、シエン語 仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ」『年報』第2号、125-135、2004年
佐々木 睦	「龍王太子考」東京都立大学中国文学研究室編『人文学報』352号、1-24、2004年 「火龍太子考」中国人文学会編『饗饗』第12号、57-75、2004年
鈴木 陽一	「中国の画像についてのノート」『年報』第1号、20-23、2004年
ジョン・ボチャラリ	「『絵巻物による日本常民生活絵引』英訳の課題と問題点」『年報』第1号、1-5、2004年
田島 佳也	「蝦夷地の鯨漁業と文化財」『月刊 文化財』第493号、34-37、2004年
中村 ひろ子	「喪服の近代」日本生活学会編『衣と風俗の100年』、ドメス出版、242-270、2004年
西 和夫	「1枚の写真と23枚の絵 東京下落合の歴史を探る」『年報』第2号、62-73、2004年 「棟札・絵画史料等による益富家住宅建設年代の検討」『日本建築学界学術講演梗概集』、171-172、2004年（共著）

2班

川田 順造	『人類学的認識論のために』岩波書店、2004年 「感性の諸領域、とくに匂いの文化についてのフランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査」『年報』第1号、27-35、2004年 「メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告 人力運搬法と座法を中心に」『年報』第2号、219-238、2004年
芦澤 玖美	“Prediction of adult stature for Japanese population: an improvement of Ali-Ohtsuki equations” Anthropological Science 112(1), 61-66、2004（共著）
落合 一泰	「文化を受け継ぐ マヤ民族学への誘い」八杉佳穂編『マヤ学を学ぶ人のために』、世界思想社、165-187、2004年
夏 宇継	「日中文化の比較」、東京都南多摩高校（講演会発表）、2004年
楠本 彩乃	「足の形状特性」『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究』（平成12～15年度科学研究費補助金研究成果報告書）63-70、2004年
河野 通明	「長谷川雪旦筆『四季耕作図屏風』の基礎的検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集、269-302、2004年 「東北地方の木摺臼の全域調査 身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み」『年報』第1号、36-45、2004年 「在来農具の分布から見た東北地方」『年報』第2号、94-109、2004年
廣田 律子	「中国の善鬼 江南の仮面劇から」『アジア遊学』第59号、59-67、2004年 「中国石郵村の追儺行事に登場する鬼と翁の身体技法に関する調査」『年報』第1号、46-54、2004年 「中国湖南省新寧県瑶族『盤王節』調査報告」『年報』第2号、323-339、2004年
彭 国躍	「中国語の謝罪発話行為の研究 「道歉」のプロトタイプ」『語用論研究』第5号、日本語用論学会、2003年
山口 建治	「「散楽」の語義の変容 「散楽」日本伝来に関わって」『年報』第2号、136-142、2004年

3班

香月 洋一郎	「海人のむら民俗誌から(上)」『歴史と民俗』第20号、167-198、2004年、 「集落景観分析への一試論」『調査研究資料』第1号、1-76、2004年
北原 糸子	「災害の社会像」『1855 安政江戸地震報告』、中央防災会議、43-125、2004年 「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『年報』第1号、62-104、2004年(共著) 「災害と写真メディア 1894年庄内地震のケーススタディ」『調査研究資料』第1号、77-126、2004年
田口 洋美	「小国マタギ 共生の民俗知」、『農山漁村文化協会、2004年(共著)』
富井 正憲	「旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告」『年報』第1号、126-157、2004年(共著) 「旧南洋群島の神社跡地調査報告」『年報』第2号、239-322、2004年(共著)
中島 三千男	「旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告」『年報』第1号、126-157、2004年(共著) 「旧南洋群島の神社跡地調査報告」『年報』第2号、239-322、2004年(共著) 「海外神社跡地に見る景観の変容」『調査研究資料』第1号、161-215、2004年
八久保 厚志	「渋沢フィルムの図像解析とその応用」『年報』第1号、105-125、2004年(共著) 「写真資料と景観変容 澁澤フィルムの分析にむけて」『調査研究資料』第1号、127-159、2004年(共著)
浜田 弘明	『相模原市史 現代図録編』、相模原市、2004年(共著) 「『渋沢フィルム』の景観分析とその課題 朝鮮半島多島海を事例として」『年報』第2号、74-93、2004年 「写真資料と景観変容 澁澤フィルムの分析にむけて」『調査研究資料』第1号、127-159、2004年(共著)
増野 恵子	「明治中期の災害画像を考える メディア史の視点から」『年報』第2号、36-61、2004年
三鬼 清一郎	『愛知県史史料編11』(織豊1)、愛知県、2003年

4班

佐野 賢治	「“非文字資料”と地域社会 福島県只見町の民具保存活用運動」『年報』第1号、159-168、2004年 「納西族文化の象徴・東巴文字」『アジア遊学』第63号、64-72、2004年
青木 俊也	「生活再現展示をつくる思考 展示利用者調査の試行」『松戸市立博物館紀要』第10号、2003年
宇佐見 義之	『生物の形の多様性と進化』、裳華房、2003年(共著)
大里 浩秋	「上海歴史研究所蔵宗方小太郎資料について」『人文学研究所報』第37号、1-20、2004年
金子 隆一	“The History of Japanese Photography” Yale University Press,2003(共著)
橋川 俊忠	「近世能登・加賀に流通した書籍」『歴史と民俗』第16号、29-78、2000年
木下 宏揚	「電子図書館と情報セキュリティ」『年報』第1号、188-194、2004年
齊藤 隆弘	「デジタル画像処理による古い映像フィルムの修復とデジタルフィルムアーカイブの構築」『年報』第1号、169-187、2004年
孫 安石	「上海的無線広播と日語大東広播電台」上海市档案馆『租界里的上海』、上海社会科学出版社、121-130、2003年
田上 繁	「近世伊豆国伊東地域における山林利用について」『伊東市史研究』4号、45-75、2004年 『中世・近世土地所有史の再構築』、青木書店、213-244、2004年(共著)
中村 政則	「20世紀・日本史学史の里程標」『歴史評論』第646号、61-67、2004年 「自分史・地域史・国民史」『長野県飯田市地域史研究所年報』2、7-18、2004年 「歴史学という学問」『歴史民俗資料科学研究』第9号、25-33、2004年
能登 正人	「ノード負荷を考慮したモバイルエージェント間通信の制約充足モデルにおける評価」、『情報処理北海道シンポジウム2004、2004年(共同発表)』
的場 昭弘	『マルクスだったらこう考える』、光文社、2004年
丸山 宏	「宗教と中国 四川と雲南における彝族の民間信仰からの視点」『中国 社会と文化』第19号、中国社会文化学会、68-98、2004年 「納西東巴古籍訳注全集の資料的価値について」『年報』第2号、212-218、2004年



主な研究活動

研究推進会議 (2004年12月～2005年3月実施分)

- 第7回 12月15日 (2005年度研究計画・研究組織、中間評価実施への対応、研究拠点形成調書提出 他)
- 第8回 12月22日 (中間評価実施への対応、2005年度予算、事業推進担当者の追加 他)
- 第9回 1月11日 (研究拠点形成調書提出、収集資料等の保存・管理(案)について 他)
- 第10回 1月19日 (中間評価関係書類について、2005年度COE共同研究員人事 他)
- 第11回 2月 2日 (2005年度COE共同研究員人事、国際シンポジウム実施委員会について 他)
- 第12回 3月 2日 (2005年度COE研究員(PD)の選考、COE研究員(RA)の募集要項(案)他)

研究会 (2004年12月～2005年2月実施分)

- 12月3日・1班 佐々木 睦 / 「『姑蘇繁華図』の編さんについて」
金 貞我 / 「『朝鮮版生活絵引』試作本の作成」
- 1月12日・1班 ジョン・ボチャリ / 「『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳成果」
- 1月21日・1班 菊池 勇夫 / 「アイヌ・北方史関係の絵引き試案本に向けて」
- 1月31日・1班 佐々木 睦 / 「遼寧省博物館訪問についての報告」、『姑蘇繁華図』図像抽出作業
- 2月21日・4班 青木 俊也 / 「戦後生活再現展示に関する問題」

現地調査 (2004年12月～2005年1月実施分)

増野 恵子	大阪府大阪市 (12月9日～11日)
大阪府公文書館にて明治18年大阪洪水資料調査	
金 貞我、田島 佳也	韓国 ソウル・ブサン (12月10日～15日)
漢陽大学校博物館、慶熙大学校博物館他で韓国版生活絵引き制作のための図像資料調査	
君 康道	山口県周防大島町・広島県宮島町 (12月11日～13日)
周防大島文化交流センター、宮島町歴史民俗資料館にて絵引き作成のための資料収集	
三鬼 清一郎	愛知県名古屋市 (12月11日～15日)
名古屋市博物館・名古屋大学図書館等での文献資料の調査研究	
君 康道	兵庫県神戸市・大阪府大阪市・京都府京都市 (12月18日～20日)
真光寺、天王寺、因幡堂での『一遍聖絵』関連の資料収集	
香月 洋一郎	埼玉県秩父市・西部山間 (12月23日～24日)
環境データを収集している西日本の山村との比較調査	
佐野 賢治、橘川 俊忠	福島県南会津郡 (12月23日～24日)
只見町教育委員会で民俗資料情報発信法の「学行(大学と行政)」提携の方法論的検討	
増野 恵子	島根県浜田市 (12月24日～25日)
浜田市立図書館にて明治5年浜田地震資料調査	
河野 通明	千葉県市川市・八千代市・浦安市他 (1月20日～22日)
市立市川歴史博物館、八千代市立郷土博物館、浦安市郷土博物館他での関東地方在来農具の比較調査	
鈴木 陽一、佐々木 睦	中国 遼寧省瀋陽 (1月20日～23日)
遼寧博物館における原資料の確認、撮影等の資料調査	

- ① Suzuki Yonejiro *The Soshi Bushi*
(ジャパンタイムス社刊、1898)
- ② Takashima S. ほか編 *Illustrations of Japanese Life*
(K.Ogawa, F.R.P.S. 発行、1898)
- ③ Louis Williams *Japanese Exhibition Catalogue*
(茂美商店刊、1897)
- ④ 著者不明 *Japanese Customs · From Ancient till Modern*
(出版社不明、1895)
全て、ちりめん本



調査研究協力者

2005年3月現在

本学プログラムの調査研究活動を支援していただくため、今年度のCOE調査研究協力者に、右の方々を追加委嘱されました。

班	氏名	所属部局・職名
1	ラクエル・ヒル	神奈川大学外国語学部・特任講師
1	サイモン・ジョン	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・博士前期課程
1	ティモシー・コールマン	東京大学大学院総合文化研究科・修士課程
4	ウイリアム・リンゼイ	カンザス大学宗教学部・准教授
1	林 海濤	東京都立大学大学院人文科学研究科中国文学専攻・修士課程

2004年度 神奈川大学21世紀COEプログラム 外部評価の実施

日時 2005年2月14日(月)

会場 横浜キャンパス21号館 304会議室

2月14日、本学プログラム外部評価委員である静岡大学情報学部教授の八重樫純樹氏、国立歴史民俗博物館助教授の常光徹氏、立正大学文学部教授の黒田日出男氏による、外部評価が実施されました。評価結果については次号に掲載します。



編集後記

COEの2年目が終わる。ニューズレターは文字媒体による広報。文化情報発信の新技术開発をテーマに掲げる本プロジェクトでは情報媒体としてホームページの活用を注ぐ必要がある。折から、わがプロジェクトと共通項の多い、中国教育部版COEともいえる中山大学非物質文化研究センターが設立された。世界中の同様な機関との情報交換も積極的に推進していきたい。(佐野)

年報2号、調査研究資料1号と相次いで刊行されたCOE刊行物は、本誌で今年度を締め括ることになります。今までの記録として読み返してみると、改めてこの1年間の活動が思い出されます。来年度は今年度に増して新しい活動が始まります。そうした活動情報を、誌面でどんどん取り上げていきたいと思ひます。(関)

年報第2号『人類文化研究のための非文字資料の体系化』

2004年12月発行

編集・発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

ホームページ (<http://www.himoji.jp>) では年報1号、2号がPDFファイルでお読み頂けます。



調査研究資料第1号『環境と景観の資料化と体系化にむけて』

2004年12月発行

編集：人類文化研究のための非文字資料の体系化 第3班

発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

共に内容については、本誌28～29頁をご参照ください。

日本常民文化研究所

神奈川大学日本常民文化研究所 論集21『歴史と民俗』

2005年3月発行

発行所：(株)平凡社

内容：明治天皇の大喪と台湾 代替わり儀式と帝国の形成(中島三千男) / 文化財指定の問題点、そして庶民文化財の試み(西和夫) / 海人のむらの民俗誌から(中) 宇久島・平調査ノート(香月洋一郎) / 浜波太漁業組合の成立と役割 残存史料の再検討から(鈴木江津子) / ふたつの「距離」と民俗展示 さわれる展示を通して(羽毛田智幸) [資料紹介] 加藤完治・満州移民の戦後史(中村政則)、GHQと民族学・民俗学 民族学振興会文書に見る戦中・戦後の学術界(中生勝美)



外国語学研究科 中国言語文化専攻

ワークショップ

日時：2005年4月28日(木) 15:00～18:00(予定)

会場：横浜キャンパス21号館405室

テーマ：「近代アジア関連図像資料のデジタル化および中国における日本租界」

報告者：貫志 俊彦(島根県立大学)

柴山 守(京都大学)

孫 安石(神奈川大学)

『神奈川大学大学院 言語と文化論集』第11号

2004年12月発行

編集・発行：神奈川大学大学院

外国語学研究科

内容：ワーズワスの想像力 「行商人」と『序曲』(岩崎豊太郎)、英語の会話におけるイントネーションの役割(澤村香代子) 日本人の幼児における動詞構文の発達について(松尾貴哲) 白居易の「贈内詩」(黄暉)、中国における危機言語問題 言語転用が招く言語の死(宮本大輔)



歴史民俗資料学研究科

『歴史民俗資料学研究』第10号

2005年3月発行

発行：神奈川大学大学院

歴史民俗資料学研究科

内容：デカルの「語り」に関する一考察 ダラムサラのデカルの語りを中心に(古谷野洋子) 雑色ノート 平安京の庶民生活を文献史料に見る試み(繁田信一) 日本人研究者による初期韓国シャーマニズム研究 秋葉隆の業績を中心に(金花子) 離農家を継ぐ 北海道紋別市のカヨイサクとカヨイサク地への定住(土田拓) 博物館資料の現在(中村ひろ子) 繁田信一著『陰陽師と貴族社会』(高野宏康) 富澤達三著『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版』(大坪潤子)



各研究所・研究科 問い合わせ

刊行物や催し物については該当する各所にお問い合わせください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358)

外国語学研究科 中国言語文化専攻(内線4525)

歴史民俗資料学研究科(内線4024)

非文字資料研究 No.7

発行日 第7号 2005年3月31日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661

Fax.045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp>

